

奉仕と信愛

—人生のプロセスと真の目的—



スワミー・アーナンダ

奉仕と信愛

—人生のプロセスと真の目的—

スワミー・アーナンダ



デイビヤダーム・ヨーガアーシュラム



オーム・マー

アサトー マー サツト ガマヤ
タマソー マー ジョーテイル ガマヤ
ムリテヨール マー アームリタム ガマヤ

非実在から実在へ

暗闇から光へ

死から不死へとお導きください





聖マザー マー・バーバマイー・パラマハンサ

深い敬意とともに、尊きグルへのささやかな奉仕として本書を捧げます。





スワミー・アーナンダジー

まえがき

「常にグルを思い、神を思い、人生の真の目的を思いなさい。

これら三つを生涯にわたって思うことができれば、
あなたの人生は有意義なものとなるでしょう」

スワミ・アーナンダ

靈感に満ちた右の言葉は、スワミ・アーナンダ・マハラージの深い叡智にもとづいており、本当に価値のある人生とはいかなるものかについて、その本質を明らかにしています。それは、奉仕、信愛、献身を礎とし、人生の本来の意味に即した生き方をすることです。

本書『奉仕と信愛―人生のプロセスと真の目的』は、スワミ・アーナンダの霊的洞察と教えを基に、私たちが人生の本来の目的を達成するための道しるべを示します。これは、心、言葉、行為を正しい方向に向け直し、無私の奉仕、揺るぎない信愛、そして神の悟りという高次の理想へと進んでいくための指針となるでしょう。

スワームीडジーご自身の人生が、この霊的な旅そのものです。スワームीडジーは、一九歳のとき、デリーの大学で学んでいる際に、世俗的な事柄への興味をまったく失って、人生の真の意味を見つけないという強い願望を抱くようになりました。この内なる呼びかけに応えて、スワームीडジーは学業を離れ、心を満たしてくれる何かを求めて、インド中を旅する探求の道に進まれました。

そして、神のご配剤により、スワームीडジーは、オリッサ州プリーの聖なる砂浜にある小さな庵へと導かれ、そこでグルと巡り会いました。ディビヤダームの聖マザー、マー・バーマイー・パラマハンサです。出会ってから何回目かの面談で、スワームीडジーは、ヒマラヤへ行つて、霊性の師に会いたいという願いを聖マザーに伝えました。すると聖マザーはこうおっしゃいました。「でも、どこへ行こうとも、心が一緒にしましょう。心に平安と調和がなければ、どこへ行こうとも、心の混乱を抱えたまま行くことになるのですよ」。この深遠なる真実の言葉に、スワームीडジーは心の底から揺さぶられました。スワームीडジーは、謙虚な気持ちになり、また徹底的な無力さを感じて、助けをくださるよう聖マザーに懇願しました。これが、神聖で親密なる師弟関係の始まりとなりました。

スワームीडジーは聖マザーからイニシエーションを受けて、綿密なお導きのもと、熱心に修行をなさいました。グルの神聖な恩寵により、スワームीडジーは間もなく神秘的な霊的体験と深い瞑想の恵みを受け、真我の悟りへと歩みを進められました。一九八六年には、ハリドワールで行われたクンブ・メーラー祭のときにサンニャーサ・イニシエーションをお受けになりました。その後、グルのご指示に従い、スワームीडジーは、求道者たちが内なる喜びと光を発見できるように手助けすることに生涯を捧げられ、インドだけでなく、ヨーロッパ、日本、チリでもご指導なさいました。スワームीडジーのメッ

セージは、グルのお教えとご自身の靈的體驗に根ざしたもので、魂に深く響くものです。そのインスピレーションによって、多くの人々が靈的な道を歩むようになり、その人生は決定的に変わりました。

二〇〇二年五月に聖マザーが永遠のお住まいにお戻りになられた後、スワームījīはディビヤダーム・ヨーガアーシラムの院長となられ、奉仕を続けていらっしゃいます。スワームījīは、師の教えと理想を生きた伝統として堅持され、講話、セミナー、個別のやりとりなどを通じて靈的な道を求める者たちを導き続けてくださっています。

「常にグルを思い、神を思い、人生の真の目的を思いなさい」というスワームījīのお言葉は、本書を読むにあたっての導きの光となるでしょう。グルを思うことは、智慧と慈悲の源への献身と信愛を堅持することであり、神を思うことは普遍的な愛へと心を開き、行為を奉仕へと変えることです。そして人生の真の目的を思うことは、儚いものを捨て、永遠なるものを受け入れることであり、人生のあらゆる側面を高次の目的と調和させることです。読者の皆様が、本書からインスピレーションを得て、人生の流れのなかで立ちどまり、自分自身を見つめ直し、揺るぎない信念をもって奉仕と信愛の道を歩まれますようにお祈りいたします。

出版に寄せて

敬愛するスワミ・アーナンダジー・マハラージの啓発的な講話集『奉仕と信愛―人生のプロセスと真の目的』を、喜びとともにお届けします。本書は、一九九九年八月にオリッサ州プリー県モトリ村のデイビヤダム・タポーヴァン・アーシラムで、スワミ・ギー師が求道者たちのために行ってくださったご講話に基づいています。その霊的なお話とお教えは、深遠でありながらわかりやすいものになっています。

このご講話において、スワミ・ギーはまず、靈性に満ちたこのインドというユニークな場において、聖マザーの御足元にやってきた求道者たちを歓迎くださいます。このインドという場では、人生のより深い意味を見出す機会が与えられるのです。人生は靈的成長のための貴重な機会です。スワミ・ギーは、輪廻転生という靈妙な過程と、人間として誕生したことの稀有な幸運について詳しく説明くださいます。そして、靈的向上のために、人間の身体をもって生まれ、この世界の無常を知り、グルに出会うことができたという、この貴重な機会を最大限に活かすように求道者たちにお説きになります。

次に、靈的な悟りに向けた準備として奉仕が必要であることが述べられます。無私の行為がもつ変容の力、靈的なグルに対する従順と献身を育むことの重要性が強調されます。

そして、ウパニシャッドの物語を通して、無私の奉仕が悟りに至るための重要な手段であることが示されます。信愛と帰依に満ちた献身的な行為は、霊的な浄化と解脱へと導いてくれるのです。さらに、物質的な執着を超えて、神への専心的な愛を深めることで、この世の苦痛や苦しみを克服できるということが説明されます。

ご講話は、バクティ、つまり神への信愛の説明へと続きます。バクティは、神のご臨在を実際に経験するための道です。自らが選んだ人格神との関係を深めていくこと、そうした信愛の実践は大きな変容をもたらす力があります。スワミーजीは、真摯な切望と献身によって神が現実の存在となるとお説きになります。そして、感動的な物語を通して、切実な信愛によって神が実際の姿をとってお現れになった実例を示されます。スワミーजीは、信愛の道における神とのさまざまな関係のありかたについて解説され、特定の「バーヴァ」（神に対する態度）を育むことで、霊的な生活が豊かになり、日常活動の全般が神聖なものになりうるということをお示しになります。

さらに、スワミーजीは、インドという土地の神聖さについてもお触れになっています。インドは、神の化身によって聖なる足跡が残された祝福された地として崇められています。これらの神聖な場所で奉仕することが、霊的な成長と神とのつながりを深める手段として重要なのです。ご講話での締めくくりでは、霊的实践における感謝の重要性が強調されます。生命を支える自然の恵みとその背後にある神のご配剤を認識し、神への信愛を深めるための基礎として、感謝の気持ちを養うことが重要なのです。

『奉仕と信愛―人生のプロセスと真の目的』における貴重なお話とお教えを通じて、スワミーजीは、無私の奉仕と信愛の基礎を理解し、実践するための包括的なお導きを読者に提供くださっています。真摯な読者は、奉仕の実践と心からの信愛からなる自己

変容の旅への明確な道しるべを得て、最終的には、信仰する神が自らの内にも外にも顕現する、霊的な悟りへと導かれるでしょう。

敬愛するグル、聖マザーの御足元にて

デイビヤダム・ヨーガアーシラム

目次

	まえがき	vii
	出版に寄せて	x
	プロローグ	1
1.	グルのもとへようこそ	3
2.	人間としての誕生―大いなる幸	6
3.	奉仕―必要な準備	13
4.	悟りに至る手段としての無私の奉仕 ―ウパニシャッドからの二つの物語	19
5.	この世の痛みと苦しみを超える方法	25
6.	バクティ―人格神への愛	35
7.	誠実、切望、献身を通じて神は現実となる	43
8.	神との関係を深め、神を愛せ	54
9.	聖地と愛ある奉仕	63
10.	信愛―感謝の態度	70
著者について		79

プロローグ

「私の考えでは、心の鍛錬こそが真の靈的教育です。

自分を誰よりも下に置く者だけが、本当に偉大なのです。」

聖マザー

靈的教育の真の本質は、知識をためるのではなく、心を実践的に変容することにあります。それは、エゴを徐々に減少させ、謙虚さを育むプロセスであり、心を無私で純粹にし、最終的には、神にのみ捧げることが目的とされています。右にある聖マザーの深遠なお教えは、神を悟るという最高の幸福を求めるすべての靈的求道者にとって、道を照らす光となるでしょう。

靈的な悟りへの道は、壮大な業績によって切り開かれるのではなく、謙虚さ、信愛、無私を心のなかで静かに育むことによつて進むものです。真の偉大さは、名声、地位、榮譽にあるのではなく、心のシンプルさと純粹さに宿ります。心が謙虚で無私になり、「私」というすべての思いがなくなった時、それは神の恩寵を受け入れるのに最もふさわしい器となります。

聖マザーがお説きになる靈的教育は、サーダナ（靈的修行）の真の目的を明らかにし

ます。すなわち、心を鍛錬することで、神の愛と恩寵を受けるにふさわしい器となることです。マザーのお言葉は、真我の光を遮るプライドやエゴの覆いを取り除いて、謙虚さを育むことを私たちに促します。無私の奉仕を通じて謙虚さを育むほど、私たちは、神の存在の果てしない喜びにたいして心を開くことができるのです。

本書『奉仕と信愛―人生のプロセスと真の目的』は、神を悟るための道を歩もうとするすべての求道者へのささやかな贈り物です。人間の身体をもって生まれたというこの貴重な機会を求道者に認識してもらい、人生の目的は、単なる生存や成功にあるのではなく、無執着と信愛を育むことで神との聖なる合一を達成することにあるとお伝えするためのものです。その目的のために、聖マザーの靈感に満たされた教えは、悟りを得たグルのもとで真の霊的教育を受け、グルに無条件に従い、愛と信愛をもって無私に奉仕することを求道者に勧めています。奉仕と信愛の道は、「私と私のもの」という自己中心的な生き方から、神への専心的な愛へと私たちを導き、最終的には神のご存在を鮮明に経験する崇高な悟りへと連れて行ってくれるのです。

本書を読み進めるにつれ、謙虚さ、奉仕、信愛という道で心を鍛錬しようという気持ちが増えることを願っています。真の偉大さは自分を誰よりも下に置くことにあるという、シンプルでありながら深遠な真理に平安を見出すことができますように。そうした無私の魂は、専心的な信愛をつうじてグルと神から限らない恩寵を受け、心の器が神聖な甘露で満たされるでしょう。

聖マザーのお教えの精神に従い、心を開き、謙虚な心をもってこの旅に出発し、真の霊的教育の祝福を受ける準備を整えていきましよう。
ハリ・オーム。

1. グルのもとへようこそ

タポーヴァン 一九九九年八月三日



ここにいらっしゃる皆さんのなかには、初めてインドを訪れる方もいらっしゃるかと思います。多くの疑問が頭に浮かんでいるかもしれません。初めて来た人のなかには「私が思い描いていたインドはどこにあるのだろう」と思う人もいるかもしれません。確かにそうでしょう。なぜなら、インドにはさまざまな存在のレベル、思考のレベル、多様な性があり、時にはとても混乱させられるからです。ですから、求めているような真の靈性のある本物のインドを見つけるためには、適切な導きが必要です。

それでも、この国には世界のどこにも見られない「何か」が存在しています。ここには文化的だけでなく、靈的な「生きた伝統」が残っています。それは、数千年かけて築かれてきたものであり、今でも生き続けています。現在、その存続は困難に直面していますが、それでもどうにか生き延びています。ここは靈性（スピリチュアリティ）とダルマの故郷であり、多くの思想がこの地から世界各地に伝わっていったその源です。ここには、この靈的伝統を守り続けている少数の人々がまだ存在しています。その伝統はココナッツのようなものといえるかもしれませんが。ココナッツには殻や皮という覆い

があり、中身にたどり着くためにはその覆いを剥かなければなりません。同様に、インドの霊的伝統を知るためには外面を超えていく必要があります。見かけや表面的なものを超えて、探求しなければなりません。そうして、もし神が望み、幸運であり、良い行いを積んでいけば、この世での人生に少しでも意味を与え、価値ある目的を与える「何か」を発見することができるでしょう。

この国にはさまざまな人々が訪れますが、そのなかには人生の別の意味、より高次の目的を探しに来る人もいます。ここで人生の別の目的を見つけた人々こそが、本物のインドを見つけた人々であり、最も幸運な人々です。

皆さんもまたマザーの存在に出会えた幸運な人々なのですが、実際にそれを感じるかどうかは皆さん自身によります。皆さんの内面で何かを感じ取り、何かを受け取ることができるように願っています。というのは、輪廻転生の過程で、本物の、悟りを得た、優れたグルに出会う機会を得ることは、まさに大きな幸運だからです。それは火の温もりのようなもので、言葉で説明することはできません。自ら体感するしかないので、砂糖の甘さも言葉では説明できず、実際に味わって初めてわかるものです。ですから、皆さんがここでグルの存在の温もりや甘さを感じ取り、何かを受け取れることを願っています。

遠くからいらっしゃった皆さんの滞在が実りあるものとなり、マザーというご存在との出会いを通じて、何かを感じ、何かを受け取れるような幸運なものとなることを願っています。これからのサットサンガでは、悟りを得たグルの存在に出会うことがなぜ幸運とされるのか、またこのようないかなるご存在が人生においてどのような重なりをもつのかについてお話ししようと思います。

ここタポーヴァンでは、時には何かの困難（停電など）が生じ、日々の生活が自国ほど快適ではないこともあるかもしれません。しかし、古代のグルたちの伝統と、かれらが耐えた困難を思い出していただけだと思います。かれらには電気も水道もなく、時には食べ物すらありませんでした。究極の真理を発見した偉大なグルたちは、冬はとても寒く、条件が非常に厳しい山中で生活していたのです。それを思い出すことができれば、皆さんの困難もそれほどひどいものとは感じないかもしれません。

マザーがこの辺鄙な田園地帯にアーシユラムを造られた時、それを「タポーヴァン」と名付けられました。「ヴァン」は「森」を意味し、「タパス」は「苦行」また「熱」や「痛み」を意味します。真我、つまり私たちの内なる真の本性を悟るためには、いくつかの困難に耐えなければなりません。ここに滞在する目的は、自己自身について何かを発見することなので、困難は進んで受け入れるべきです。ここには純粋な空気、手つかずの自然、そして霊的に好ましい神聖な波動といった利点があります。そのために、このアーシユラムは、自然、木々、鳥、そして新鮮な空氣に囲まれたこの辺鄙な田園地帯につくられたのです。皆さんには、滞在中、前向きな態度をもって、好ましい面に目を向け、いくつかの不都合な面には目をつむっていただけだと思います。私たちはこれらの困難や障害を徐々に克服しようと努力してきており、これからの数年でさらに努力していきまします。現在直面しているいくつかの物理的な困難を克服できることを願っています。そして、皆さんの滞在が実り多いものとなることを心から願っています。聖なるマザーの祝福が皆さん一人ひとりに降り注がれ、心に何かを持ち帰ることができましますように祈ります。ハリ・オーム。長い旅路を経てこの知らない国、そして一見すると不思議に映るこの地までお越しくださった皆さんのご労苦に感謝いたします。

2. 人間としての誕生―大きな幸運

タポーヴァン 一九九九年八月四日



グルそして真の師は、マ―ヤーという目隠しを取り除いてくださる存在です。マ―ヤーとは、私たちの目を覆い、自己自身そして人生の真の目的を知ることを妨げる幻惑です。悟達者たちそして聖典は、人間として生まれた生は非常に貴重なものであると述べられます。

人間の身体を得るのは非常に難しく、貴重な機会であり、幸運であると言われます。では、人間の身体を得ることがなぜそれほど大きな幸運であり、人間としての生がなぜすばらしい機会なのかを少し考えてみましょう。それは私たちがより良い服を着て、より良い食事をし、教育を受け、動物よりもはるかに多くの楽しみを得られるからでしょうか。それとも、人間の身体がより貴重である理由が他にあるのでしょうか。通常、人々はこの人間の身体を持つことに価値があるのは、物質的な生活を他の生物よりもはるかに良い形で送ることができるからだと考えます。しかしそうではありません。単にそれだけの理由で人間の身体が価値あるとされ、人生がかげがえのない機会とされるわけではありません。人生が大きな機会であるのは、人間の身体に生まれることを望んでいながら

もできない多くの魂が存在するからです。チャンドーギヤ・ウパニシャッドで説明されている輪廻転生の困難な過程について読むと、人間の身体を得ることがいかにまれですばらしい機会であるかがよくわかります。

この輪廻転生の過程について少しお話ししましょう。魂がこの身体を離れる時、ウパニシャッドやバガヴァッド・ギーターによると、魂には二つの道が開かれていると言います。一つは北方の道、デーヴァヤーナ（神々の道）であり、これは神々やデーヴァ（天人）の道、つまり太陽の道です。もう一つは南方の道、ピトリヤーナ（祖先の道）で、これは月の道です。

世界放棄の人生を送り、究極の智慧を追求し、創造の精妙な原理を理解した者たちは、北方の道を通して上へと昇ります。火神によって運ばれた魂は、高次の諸領域を通して太陽の領域へと導かれます。その太陽の領域から、魂は聖なる存在である神によってブラフマローカ（梵天界）に導かれ、そこで最終的な解脱、すなわち究極の実在との合一を待ちます。このような魂は再びこの世界に戻ることはありません。かれらは身体を持つ必要性を終え、この生死の悪循環を断ち切ったのです。

私たちにとって問題なのは第二の道、つまり南方の道です。なぜなら、この道を進む者は再び転生するからです。この道に進む魂は煙によって運ばれ、段階的に闇のなかを進み、月の領域に到達します。そこでその魂は、地上で行った慈善的で無私の善行の程度に応じて、享樂を得ます。その魂は、善行の力が終わるまで、善行の果実を楽しむのです。幸運にもその魂が月の領域にまで到達できるのであれば、まずは、亡くなった祖先（ピトリ）の諸領域を通過します。ピトリローカ（祖先界）を経過して、月の領域、すなわち天界に到達し、そこで一定期間、天上の喜びを得ます。魂は、この世で善行を

行つた場合のみ、月の道に進む資格を持ちます。そうでなければ、月の領域はおろかピトリローカ（祖先界）にすら到達できず、下の世界に行く別の道を辿ります。魂は月の領域、すなわち超自然的な喜びと享樂の世界におけるビザ保持者のようなものであり、そこに永住することはできません。ウパニシャッドでは、その魂はデーヴァ（天人）の「食べ物」になると言われています。デーヴァの「食べ物」になるとは、これらの恒久的な神々に従属することを意味します。魂は一時的に天界に存在するだけであり、持続的なデーヴァではありません。ある種の特権があり、例えば外国で二級市民として滞在する場合、いろんな特権があり、仕事をしたり家を持ったりできますが、永住権を持つ市民のみに与えられるような権利はありません。しかし、より重要なのは、この享樂の期間が終わった後に何が起こるかです。善行や功績の力が消費された後、魂は再び生まれ変わりの過程を経て、この輪廻転生の現象世界に誕生します。

これは非常に興味深いことで、このことを知ると、人間の身体を得ることがいかに困難であるかが理解できます。魂は成層圈を通る時、元素と一体化します。大気圏を通り抜けるときには煙と一体化し、次いで、エーテル、空気、火、水と順に一体化します。魂は雨となり、地上に降って、穀物に入り込みます。リシ（聖者）たちは、この輪廻転生の過程を靈視（ディヴィヤ・チャクシュ）によって詳しく研究してきました。今日、科学は自然の多くの謎を説明しようとしています、最大の謎は、死後に何が起こるのか、魂が身体を離れた後どこに行くのか、何が起こるのか、そしてどのようにしてこの世に戻り、再び生まれるのかということです。西洋の物質科学が教えてきたような、単なる偶然的な生物学的プロセスによって、人間は生まれるものではありません。

表面的には、子どもは男女の結合によって生まれるように見えます。それは最も表面

的な誕生の原因です。実際には、天界での過程から人間界での男女の結合に至るまで、精妙なプロセスがその背後に存在します。魂が高次の領域から降りてくる複雑な過程があり、それが諸元素を通り抜け、男性の精液に入り、女性と結合し、胎児となり、やがて子どもになります。すでに述べたように、個体が生まれる前には神秘的な過程が存在します。それぞれの魂がどのように顕現するかには法則があり、その法則は「カルマの法則」です。ある魂は過去世で積んだカルマに応じて、特定の子宮に入られます。このことがいかに精妙なことが分かるでしょう。魂は雨を通じて穀物に入り、人がそれを食べ、その人の精液となり、女性の子宮に入り、胎児となります。そして皆さんが目にするのは最終的な結果——子どもが生まれることです。

誕生の過程は大いなる神秘です。どのような法則が作用しているのかをご存知なのは、神のみかもしれません。特定の魂がどのようにしてある穀物に入り、それを誰が食べるのかです。ですから、魂が人間の子宮に入り、人間として生まれることが、どれほど大きな幸運かを理解してください。魂は動物の身体に入ることもあり、さらには動物よりもさらに下等な昆虫などから生まれることもあります。魂が身体に顕現する複雑な過程を聞いた後では、人間の身体を得ることがいかに大きな機会であるかが理解できるでしょう。

そして、この人間の身体は、非常に特別で高度に発達したメカニズムです。このきわめて発達した人間の身体という道具を使えば、人間は束縛されているすべての限界を超越し、とらわれた生と死の輪廻から自らを解放することが可能です。たとえデーヴァ（天人）の身体であっても、身体の世界を超越することはできません。なぜなら、デーヴァには行為を選択することができないからです。天人の身体は、既に得た善行の果実を楽

しむただけのものです。新たな行為を起こす特権や選択権はありません。善行の力を消費するためだけの存在です。『バガヴァタム』では、人間の身体はサンサーラ（輪廻の世界）の海を渡るための舟に例えられています。

したがって、二つのことが言えます。一つは、この人間の身体を持っていれば、今世でより良いカルマを行うことによって過去のカルマを改善することが可能であるということです。二つ目は、この人間の身体においては、サーダナ（靈的修行）、放棄、そして一途な献身を通じて、すべての限界を超越し、解脱を得ることが可能であるということです。これは動物の身体でも、一時的に得られるデーヴァの精妙体でも不可能です。だからこそ、人間の身体を持つことは非常に貴重であり、それに生まれることは大きな機会なのです。

ただし、人間の身体を得ることが大きな幸運であり、機会であつたとしても、この人生の本来の目的を認識していない場合、それは大きな損失になります。したがって、この世界の真の本質と、この身体の無常性を認識することが非常に重要です。私たちはこの世界で多くのものを大切にしますが、それらはすべて無常で儚いものです。ここで手に入るもので完璧なものは何一つありません。ある程度の喜びは得られるかもしれませんが、多くの悲しみや不安も伴います。過去世の善行により享樂を得ることもあります、苦しみも多くあります。出会いもあれば別れもあります。これが物質世界とこの粗大な身体の性質です。これは「アニティヤ（無常）」、つまり永遠ではなく一時的であり、儚く移ろいゆくものです。ここの人生もまた「アスカム（不幸）」であり、喜びに欠けています。この世界の喜びは、悲しみと混ざり合っているからです。どの喜びも完璧ではありません。「スカム（喜び）」に「ア（不）」が加わることで、ここで得られるすべての喜

びや享樂には苦しみが伴うことを意味します。それらは完璧でなく、純粹でもありません。また、別の重要な点は、喜びのように見えるものが実際にはそうでない可能性があるということです。これらの享樂は、死後に魂が下降する道を準備しているかもしれないからです。多くの人々は、身体が消耗し病に侵されても、それを手放すことに非常に抵抗を感じます。不完全な享樂への執着が、身体を手放すことへの恐れを生み、苦しみを伴っているにもかかわらず、それにしがみつくのです。

この身体の無常性と不完全さ、この世界の痛みと悲しみを認識したとしたら、どうしたらいいのでしょうか。この状態から抜け出す道を示してくれる誰かを見つけないければなりません。ウパニシャッドは、私たちのような有限の存在（ジーヴァ）は目隠しされた人々のようなものであると記しています。私たちは目隠しをされたまま本来の家から連れ去られ、暗く密生した森に置き去りにされたのです。そして、無明（アヴィディヤ）という目隠しのために、私たちは帰り道を見つけないでいます。どこに行くべきか、どの方向が正しいか、どのようにしてこの危険な状態から抜け出すべきかわかりません。私たちはつまずき、転んでいます。これがこの世界での私たちの姿です。私たちは何度もつまずき、転んできたのに、いまだに道を見つけられていません。私たちは手探りをしながら、どこへ行けばいいのか、どの方向が正しいのかを見つけようとしています。これが私たちの真の状態です。私たちは道に迷っているのです。この哀れな状態における唯一の希望は、目隠しのないご存在の出現です。しかも、そのご存在は目隠しがないだけでなく、私たちの目隠しも取り除き、道を示してください。力をもちます。このような悟りを開いた自由な魂との邂逅は、人生における最大の幸運です。三つの大きな幸運があります。一つ目は人間の身体を持つこと。二つ目は人間の身体

の不完全さと限界、そしてこの世界の無常性と苦しみの本質を認識すること。そして最大の幸運は、この無常性から抜け出し、永遠で不変なる「あれ」へと導いてくださるご存在に出会うことです。

アサトー マー サット ガマヤ
タマソー マー ジョーテイル ガマヤ
ムリテヨール マー アームリタム ガマヤ

非実在から実在へ

暗闇から光へ

死から不死へと導きください

皆さんは祝福されています。人間の身体を持って生まれ、何らかの正しい認識を持ちあわせており、最高の幸福への道を示す知識、能力、慈悲を持つご存在に出会う機会を得たからです。
ハリ・オーム。

3. 奉仕―必要な準備

タポーヴァン 一九九九年八月五日



昨日の話は三つ目の大きな幸運のところまで終わりました。それは、私たちの目隠しを外し、方向を示し、このジーヴァ（有限なる個）に自らの限界と現象界における人生の無常を超越する道を示してくれるご存在に出会うことです。

たくさんの過去生から蓄積された自らのカルマの網に絡め取られていることを理解したうえで、その人が、生と死つまり輪廻転生の神秘の謎を解明したご存在に出会えたなら、非常に幸運です。生と死の神秘に対する答えをお持ちの、悟りを得たグルに出会ったなら、人は何をすべきでしょうか。実際に何をするかは、その魂の成熟度と、輪廻転生―生と死の苦しみをどれほど深く理解しているかに依ります。その魂は、この生と死の悪循環に囚われ、変えることができないカルマの法則によって束縛されているという状態で、自らの完全な無力さを理解しているでしょうか。

もし、ある程度でも自分が束縛されたジーヴァであるという真実を理解しているなら、「私は何をすべきか。人生の本当の目的は何か。自分はどこから来て、どこへ行くのか」といった問いが自然に湧き上がるはずで、これらの問いに答える切羽詰まった必要性を感じた時、その人は謙虚になり、これらの問いに対する真の答えを知るグルの庇護を

求めるでしょう。これが『バガヴァッド・ギーター』第四章第三四節の「タッドヴィツディ プラニパーテーナ パリプラスネーナ セーヴァヤー（「師への」服従により、質問により、奉仕により、それを知れ）の言葉の意味です。

人生のこれらの問いに対する答えを見つけていることを目指し、その人はまず「セーヴァ」つまり無私の奉仕という準備の過程を始めます。奉仕とは、単に身体的な行動をするだけでなく、完全な服従の態度を育むことも含まれます。解脱への道を導く悟りを得た師に出会えたのは非常に大きな幸運ですが、その師の指示に従うための適切な努力をしないことは最大の不幸でもあります。輪廻転生の苦しみを理解し、奉仕と服従を通じて自らを解放しようと努力する人々こそ、本当に幸運な人々です。

インドでは長いあいだ、バラモンやクシャトリヤの少年は、ある年齢に達するとグルクラ（師の家）に行くという伝統がありました。そこでは、厳格な「ブラフマチャリヤ」（禁欲）の規律を守りつつ、当時の世俗的な知識を学ぶと共に奉仕を行っていました。これによって、かれらは自らを準備し、より高次の知識に対する受容力を育んでいたのです。今日では、多くの若者―特に教育を受けた若者たち―が迷っています。どこに行くべきか道が分からずにいます。生活の糧を得るための教育だけでは不十分です。何かが決定的に欠けているのです。かれらは暗闇のなかで手探りし、道を問うています。現代では、霊性（スピリチュアリティ）についての美しい話がいくつも聞こえてきます。本やウェブサイトを通じて簡単に情報を得ることもできます。しかし、それでもなお、「より高次の聖なる人生を送るための実際の方法は何か」という疑問は残ります。

このシステムは何千年も前と同じでなければなりません。ただ、時代に合わせて少し修正されるかもしれません。つまり、サンヤマ（自己制御）とグルへの奉仕の実践です。

かつて弟子たちは畑の世話をしたり、牛の世話をしたり、アーシユラムでの日常業務をこなしてグルに奉仕していました。今では、かれらと同じことをすることは難しいかもしれないし、アーシユラムではなくオフィスでコンピューターを使って仕事をする必要があるかもしれません。しかし、それもまたグルのためであり、したがってこれらの現世的な行動は神に捧げられるべきです。

「なぜそうする必要があるのか。奉仕の目的は何か。師の庇護を求める目的は何か。なぜ自己制御とブラフマチャリヤが必要なのか」と疑問に思うかもしれません。「私たちは、コースに参加したり、本を読んだり、講義を聞いたりすることができません。グルの必要はなく、奉仕も必要なく、自己制御も必要ないのではないか」と考える人もいるかもしれませんが。ですが、当時の人々も、ただ師の話を聞くだけで賢くなることができたはずでは、なぜクリシユナ神はアルジュナに「タッドヴィツディ プラニパーテーナ リプラスネーナ セーヴァヤー」とおっしゃったのでしょうか。ブラフマチャリヤの禁欲や奉仕を通じ、身体的、精神的、霊的に準備を整えてはじめて、人は、超越的な智慧を受け入れ、自らのうちに保ち、その真の意味を理解して、最終的にその真理を直接経験することができのです。通常のジーヴァは、この超越的な智慧を受け取る能力や感受性を持っていません。

第二に、奉仕を通じて、すべての人に内在するラジャスが自然な方法で変容されます。このラジャスは欲望を生み、私たちを落ち着きのない行動に駆り立てますが、自然に内在するこの行為またラジャスの力は、より高い目的に向くづけられ、無私なものにされることで、徐々に変容し、最終的に超越されます。過去の人生から積み上げられたこの活動力が超越されればされるほど、純粋な真我の静寂が確立されていきます。鏡が清浄

であればあるほど、その反映はより明瞭になるのです。

私の理解するところでは、霊的な生活の全目的は二つのことの発展にあります。一つは「無執着」、もう一つは「信愛」です。世俗的な快樂への無執着と、神への信愛です。ただし、これらの二つの根底にあるのは「カルマ」、すなわち正しい行為です。無執着と信愛を育むためには、まずその目的に応じた行為を行うことが第一歩です。皆さんは「アーシラムにずっと住むことはできないし、それは昔のシステムだ。我々は現実世界に生きているのだから、どうやってこれを適用すればいいのか。カルマ・ヨーガをどうやって実践すればいいのか」と疑問に思うかもしれません。自己中心性や利己心を克服し、行為や仕事から行為主体性や行為者意識（「私が行為者である」）を取り除くと、どのような仕事も礼拝になります。

神は四つのことをおっしゃっています。まず、「私にのみ意（こころ）を置け。私に知性を集中せよ。その後、あなたはまさに私のなかに住むであろう。疑問の余地はない」（ギター第一二章八節）とあります。もしそれができず、心が神に集中できない場合は、「アビヤーサ・ヨーガ」、すなわち「常修のヨーガ」を行いなさい、とおっしゃっています。例えばヨーガやジャパを行ったり、マントラを書いたりすることもこの「常修」です。「もしあなたが心を堅く私に集中することができないなら、常修のヨーガによって私に達することを望め。アルジュナよ」（ギター第一二章九節）。それでも、時間がない、動機が足りない、その他の理由でそれを行うことができない場合、神は第三の代替案をお与えになります。「もし常修にも能力を欠くなら、私のための行為に専念せよ。私のために行為をしても、あなたは成就に達するであろう」（ギター第一二章一〇節）。アーシラムでの生活や奉仕、礼拝など、すでに述べたような活動を行いなさい、というわけです。

それができなければ、神はさらに別の選択肢をくださいます。「あなたが行っているどのような行動も、私に捧げなさい」。「もしそれもできないなら、私へのヨーガに依存して、自己を制御し、すべての行為の結果を捨てよ」と（ギーター第二章一一節）。世俗的な行為の結果もです。これは現代の世界でも可能なことであり、それゆえ私は今日、セーヴァやカルマ・ヨーガの話題を取り上げているわけです。

私たちの行為はどのように変容させることができるでしょうか。これは重要な課題です。なぜなら、それが靈性（スピリチュアリティ）の基盤だからです。この世に生きながら、私たちの行動を変容させるために何ができるでしょうか。神は「行為を私に捧げなさい」とおっしゃいます。「あなたがどんな行為をしていようとも、それを私に捧げなさい。礼拝することはできないかもしれないし、お香を焚くこともできないかもしれない。花を捧げることも、寺院に入ることも、私のためだけに奉仕をすることもできないかもしれない。花を捧げることも、あなたが生きていくために、あるいは他の目的のために行っているどのような行為もすべて、私のために行い、私に捧げなさい」と。それによって、あなたの行為は変容します。よくない影響を及ぼすことはありません。これが、私たちのパラムグルデーヴ、スワミ・シヴァ・ナンダジー・マハラージの「聖なる教師になりなさい、聖なる技術者になりなさい」というお言葉の意味です。あなたが何をしたいようとも、それを辞める必要はありませんし、おそらく辞めることはできないでしょう。その仕事を神に捧げ、普遍的な善のために働くことで、その行為を変容させてください。神性の本質は広大さ、拡がり、そして無私にあり、帰依と捧げを通じて、心は徐々に浄化され、視野が広がります。

ですから、この「捧げる」という技法を実践してください。どんなことをしたいようとも、

「おお神よ、私はこれをおあなたのために行っていきます。おおグルよ、これらの行動をおあなたに捧げます」と自らに言い聞かせることです。ある人が私に「私は何をすべきでしょうか。何も修行できませんし、常習もできません。以前のように長時間瞑想する時間が見つかりません」と尋ねました。あなたができることは、「おお神よ、私が行っているこれらの行動はすべてあなたのためです」と考えることです。

次に、行為者意識を取り除く練習をしてください。「私は行為者ではない、私はただの道具である」と考えることを通じてです。その趣旨のサンスクリット詩があります。その要旨は「おお神よ、私の心に座す方よ、あなたが私に行わせ、あなたが私に靈感を与えておられます。私が行っていることは、実際にはあなたが行っていることです。私はあなたの手のなかのただの道具です」と。これは修習であり、一種のサーダナです。何時間も部屋で座っている必要はありません。オフィスで働きながらもできる方法です。これは古い態度を変え、それを変容させる方法です。変容はすぐには起こりませんが、「私は行為者ではない」と常に思い起こすことで、ある日それは自然に生じるでしょう。すでに述べたように、行為から利己心を取り除くことで、仕事は礼拝となります。したがって、行為者意識を徐々に取り除くことで、神の道具、普遍的な大いなる霊の媒介となります。あなたはその行為は捧げものとなります。もし教師をしているなら、教えることが神聖な奉仕となります。もし医者で人々を治療しているなら、より高次の力があなたを通じて働くでしょう。こうして、現在の状況においてもグルクラの精神を取り入れることができます。この世界において光の小さなきらめきとなり、他者に喜びを与え、温もりを与え、同時に究極の悟りのために準備することができるようです。

4. 悟りに至る手段としての無私の奉仕

―ウパニシャッドからの二つの物語

タポーヴァン 一九九九年八月六日



無私の奉仕、献身的な行動は、浄化のための清らかな流れであり、それによってカルマと自己本位さという不浄が洗い流されます。カルマは信仰と礼拝の態度で行うとヨーガになります。小さな自己のためではなく、より高い目的のために行動する時、そのカルマはヨーガとなり、また浄化と解放の手段となります。信仰と献身とともに、誠実に行われたカルマは、それ自体で悟りに導くことができます。今日は、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』に見られるこのような献身的な奉仕の二つの例をお話しします。

これは二つの小さな物語ですが、架空の話ではありません。これらは事実に基づいており、実際に起こったもので、本物です。ウパニシャッドには時折、あることを説明するためにこのような小さな物語が含まれています。今日はそのなかから二つの物語を紹介します。一つはサティヤカーマ・ジャバーラの話、もう一つは彼の弟子であるウパコーサラ、カマラの息子の話です。ヴェーダ時代、多くの少年、特にバラモンは、ある年齢に達するとブラフマ・ヴィツディヤ（梵知）、すなわち究極の真理についての知を師から学びにいました。かれらは家を離れ、グルクラ（師の家）に行き、師の庇護を

受け、師の家族の一員となり、奉仕を行いながら、徐々にブラフマの神秘を学んでいきました。

サティヤカーマも適切な年齢に達した時、母親ジャーバーラーに尋ねました。「おお母よ、私は師の庇護を受けたいと思います。私の家系、ゴートラ（父系氏族）は何ですか」と。すると母親は言いました。「息子よ、私はあなたの父の家系を知らないのだよ。私は当時、召使いで、何人もの人に仕えていたので、あなたの家系がどこに属するのかはわからない」。母親は不貞だったのではなく、単に忙しく、また学識もなかったために夫のゴートラを尋ねなかっただけで、夫は彼女が若い頃に亡くなったのでしょう。母親は言いました。「息子よ、私はあなたのゴートラを知らない。父親のゴートラはわからないし、あなたの姓もわからない」。当時、師たちはブラフマ・ヴィッディヤの神秘を教えるにあたって弟子を選ぶ際に非常に厳格でした。弟子たちは正しい家系の者でなければならなかったのです。それで、この少年は自分の家系を知りたがったのです。しかし、母親は言いました。「息子よ、私はあなたの父の家系を知らない。私の名前はジャーバーラだから、師には『私はジャーバーラーの息子、サティヤカーマ・ジャーバーラです』と言いなさい」と。

少年は、薪を手にして師の家へと出発しました。少年は聖者リシ・ハリドウルマタ・ゴータマを師として選び、その足元で庇護を求めました。ゴータマ師は少年に尋ねました。「我が子よ、名前は何かというのか。ゴートラは何か」と。サティヤカーマは答えました。「おお尊敬すべき師よ、私は自分の家系を知りません。母が言うには、召使いであった時に私を産んだそうで、父の家系については尋ねなかったため、私がどの家系に属するのかは知らないそうです。私はサティヤカーマ、ジャーバーラーの息子です」。リシは少年の答えを聞いて言いました。「我が子よ、こんなにも正直に答えるのはバラモンにし

かできないことだ。だから、お前を弟子として受け入れよう」と。こうしてゴータマ師はサティヤカーマを弟子として受け入れ、四百頭の痩せた牛を彼に与え、森に行き牛の世話をするように命じました。

それでサティヤカーマは、それらの牝牛と一匹の雄牛を連れて良い牧草地を求めて森林に向かいました。そして心のなかで決意しました。「この牛を千頭に増やした時にグルのもとに戻ろう」と。サティヤカーマは森で真心を込めて牛たちを世話しながら生活しました。

多くの年月が過ぎたある日、群れのなかの雄牛がサティヤカーマに話しかけ、「サティヤカーマ、牛は既に千頭いるので、グルクラに戻ろう」と言いました。雄牛はさらに「私はブラフマ・ヴィッディヤの四分の一を教えよう。後にはアグニ（火）がもっと教えてくれるだろう」と言いました。翌日、サティヤカーマは聖なる火を焚き、火の前に座り、薪をくべました。すると、火が彼の前に現れ、「サティヤカーマ、究極の真理について教えよう」と言いました。火は彼に教えを授け、「次は白鳥がもっと教えてくれるだろう」と言いました。すると突然、白鳥が飛んできて、ブラフマ・ヴィッディヤの三つ目の四分の一を教えてくれ、「最後の四分の一は水鴨が教えてくれるだろう」と伝えました。このようにして、サティヤカーマは雄牛、火、白鳥、水鴨から教えを受けました。

翌日、サティヤカーマは千頭の牛を連れてグルのアーシラムに到着しました。グルはサティヤカーマを見ると、「お前はブラフマの知識で輝いている。誰かがお前に教えたに違いない」と言いました。サティヤカーマは「はい、尊敬すべき師よ、私は究極の真理についての教えを受けました」と答えました。そして、四人の教師について話しました。「しかし、私はさらなる教えを乞いたいと存じます。なぜなら、グルの教えがなければ

ば、この知識は完全でも完璧でもなく、解脱に至ることはできないからです」と。そこで、リシ・ゴータマはサティヤカーマに究極の真理について詳細を教え、その後、サティヤカーマ自身が偉大な教師となりました。

ここで強調したいのは、サティヤカーマの正直さ、誠実さ、グルの仕事への献身が、究極の真理に到達する手段となったことです。サティヤカーマがグル・セーヴァを行ったシュラッダー（信心）とニシュター（信念）により、彼は浄化され、万物のなかに霊を見るようになりました。雄牛の霊が彼に語りかけ、白鳥の霊が語りかけ、火の霊が語りかけ、水鴨の霊も語りかけました。これこそが悟りに至る伝統、すなわち誠実なグル・セーヴァ（師への奉仕）とグル・クリパ（師の恩寵）なのです。

「これが私にどう関係するのだろうか」と思っているかもしれません。「私はこの世で働いている。サーダナ（霊的修行）や瞑想をする時間がない」と。サーダナや直接的なグル・セーヴァを行う時間はないかもしれませんが、ですから、自分が行っている日常の活動そのものを捧げること、その行為を奉仕に変える必要があります。そして、この奉仕は浄化の手段となり得ます。

真我を知ること妨げるものは私たちの不浄であり、行為は私たちのチッタ（心）の鏡を清めるための手段です。その浄化が行われると、光が顕現します。その光は常にそこにあったのですが、カルマの堆積物を取り除かれ、アヴィディヤ（無明）の覆いが外された時に顕現するのです。サティヤカーマに顕現したその光は、万物に反映され、これらの存在には意識の光が灯ったのでした。サティヤカーマはどのように聞いたのでしょうか。耳ではありませんでした。サティヤカーマの内なる霊と、万物にある真理の本質とのあいだに相互作用があったのです。

もしこれが唯一の事例であれば、「ただの物語に過ぎない」と言うかもしれません。しかし、同じウパニシャッドにはカマラの息子であるウパコーサラという弟子の別の例があります。ウパコーサラもまた若い学生で、サティヤカーマ師のもとで庇護を受け、十二年間奉仕をしていました。すべての生徒たちが課程を修了すると、卒業していきました。グルはかれらに、教えを受けたのだからグルクラを離れてこの世のなかで各々の道を進むように言ったのです。しかし、ウパコーサラには究極の真理を伝えることもなく、グルクラを離れるようにも言いませんでした。この若い弟子は何年ものあいだ、火を丁寧に世話し、祭火を誠意と献身を持って維持していました。

グル・マーター（尊師の伴侶）は弟子のために懇願しました。「なぜこの弟子に真理を教えないのですか。もし教えなければ、不正となり、火はあなたを呪うでしょう。ウパコーサラは誠実にあなたに奉仕していますし、ブラフマ・ヴィッディヤ（究極の真理）の真摯な求道者です。どうか教えてあげてください」と。しかし、グルは聞こえないふりをし、旅に出かけました。食事の時間になっても、ウパコーサラは来ませんでした。そこでグル・マーターは彼を呼びに行き、「なぜ食事に来ないのですか」と尋ねました。ウパコーサラは答えました。「お母よ、今日は食欲がありません。心が不浄に満ちているからです」。ウパコーサラは食事を摂らず、供物を捧げる火の場で横たわりました。どのアーシラムにも、供物を捧げるための聖なる祭火がありました。

悲しみに沈むウパコーサラに、火たちが現れて形を取りました。「火たち」というのは、祭火は四つに分かれており、それぞれに供物が捧げられ、それぞれに異なる意味があるからです。それらすべてが目に見える形をとって現れました。そして、各々が彼に究極の真理について教え始めました。火は言いました。「大地、食物、火、太陽、これらすべ

てがブラフマンの形であり、これらに礼拝することはブラフマンを礼拝することである。これらのなかに宿る霊がブラフマンである。すべての方向がブラフマンである。月に宿り、植物や葉草を養う存在が『私』である。『私』は空や稲妻としても顕現する」。

最後に火たちは言いました。「親愛なる子よ、私たちと霊に関する智慧を授けた。それ以外のことは、あなたのグルが教え、智慧の果実についてお話くださるだろう」。しばらくして、師が戻ってきた時、ウパコーサラを見て言いました。「おまえのなかにブラフマンの光が輝いているのが見える。誰がおまえに教えたのか」。ウパコーサラは答えました。「尊敬する師よ、私は人間からは誰からも教えを受けてはいません。しかし、今見えるこれらの火がさまざまな形を取り、究極の真理について教えてくれました」と。師は尋ねました。「究極の真理についてどのような教えを受けたのか」。ウパコーサラは、何を聞いたかを述べ、この火はこれを教え、あの火はあれを教えてくれましたと、火たちから受けた教えを説明しました。師は非常に満足し、「そうだ、それは正しい教えた。そして、今から残りの教えを聞きなさい。これがおまえを解脱へと導くだろう」と言いました。そして、師はウパコーサラに悟りをもたらし教えを授け、解脱への道を開きました。

私が皆さんにウパニシャッドの物語を聞いていたくださった理由の一つは、それらが他の時代のものであるにもかかわらず、非常に魅力的であるからです。もう一つは、誠実な奉仕は悟りへの道であるという、私の言いたかったことを示すためです。純潔な生を送りながら献身的な奉仕をなすことは、解脱をもたらし究極の智慧へと導いてくれるのです。

ハリ・オーム、グル・ナーラーヤナ。

5. この世の痛みと苦しみを超える方法

タポーヴァン 一九九九年八月七日



人は喜びを求め、幸せを望み、悲しみや痛みを避けたいと思っています。また、得た幸福や喜びが終わらず、永遠で完全なものであってほしいと望みます。すべての存在は幸せでありたいと願っています。誰も悲しみを望みませんし、誰も痛みを欲しません。誰かが幸せであれば誰も気に留めません。子どもが幸せで遊んでいれば、誰も気にしません。子どもが泣くと母親が心配し、他の人たちも「どうしたのだろう」と気にします。なぜなら、幸せでいることが自然であり、痛みや悲しみは不自然だからです。それゆえ、この世界ではすべての人が生き延びるためだけでなく、喜びを得るために努力し、奮闘しています。しかし、どれほど努力しても、誰も実際に理想的な喜びを見つけることができません。現実には、痛み、苦しみ、恐れ、そして挫折があります。では、なぜ多くの努力を重ね、豊かな資産を蓄積したとしても、満足や幸福を得られないのでしょうか。人は痛みを望まず、すべての人間の努力は痛みや病いを取り除くことに向けられています。私たちは苦しみを取り除き、完璧な生活をすることを望んでいます。結果的にはそうはならず、日に日に人間の苦しみは増しています。

賢者、悟りを得た師、そして聖典は、この物質的世界の本質自体が不完全であり、無常であると語っています。たとえ喜びがあったとしても、それは百パーセントではなく、悲しみと混じり合っています。快樂には痛みが伴います。すべての創造物の本質は無常であり、儚いものです。シャーストラ（聖典）には、この人間の身体においてすべての人が三種の「タパス」（熱や痛み）を受けると書かれています。それらは、アディバウティカ（他者由来）、アディダイヴィカ（自然由来）、そしてアディヤートミカ（自己由来）です。アディバウティカは、他の生物から受ける痛みです。都市では現在、それは少なくなっています。サソリに刺されることもなく、蛇が周囲にいることもありません。虎の恐れもなく、突然雄牛が現れて頭で突いてくることもありません。こうした問題は解決されているのです。しかし、それでもなお、他の存在者―ブータ（生物）―からの痛みを受けています。たとえ安全ですべてが整っていても、他の生物や子ども、妻、友人などから何らかの形で痛みを受けています。他者との関わりのなかに痛みがあります。これがアディバウティカ・タパスです。「ブータ」とは存在者を意味します。

現在、私たちの社会は非常に発展し、すべてがよく組織され、すべてが整っています。しかし、それでもなお突然洪水が起きたり、ラテンアメリカのどこかで発生したような大洪水があったりします。そうした事態は続いています。地震や台風が起こったり、雨が降らずに農作物が取れなかったり、逆に雨が多すぎて収穫が台無しになったりします。こうした状況では、私たちは自然の力に対して無力です。これらの自然災害は、アディダイヴィカ、つまり自然の要素に関わるものです。太陽、雨、火など、生命を支える要素が生命を破壊し、痛みを引き起こすのです。暑すぎれば痛みがあり、寒すぎれば苦しみます。水は必要ですが、過剰になれば生命や財産の破壊につながります。すべての人

間は、自然の要素から何らかの痛みを受けています。

三つ目はアディヤートミカであり、自己の内側から生じる痛みです。身体の病や心の病、複雑な精神的問題などです。非常に進歩した社会では、すべてが揃っています。人は「すべてが整っていて、快適で問題のない生活のためにすべてが用意されている」と言います。「ゆりかごから墓場までのすべてが整っている」と。ある人は「日本では、新しい世代が痛みというものを全く知らないような仕組みが整えられている」と私に言いました。しかし、それがどれほど成功するかはわかりません。現実には、若者が突然、絶望し、ある人は窓から飛び降り、別の人は自殺し、さらに他の人は刃物で自らの体を切ったりするということが起きています。自殺率は非常に高いですが、これらの事実はニュースに出てきません。人々が幻滅しないようにするために、世間からは隠されています。科学技術の進歩と物質的な豊かさにより、社会は完璧であるように見え、人々は自己満足と充足感の幻想のなかで生きています。

医学がある病気を治療することができるようになると、別の不治の病が現れます。これらの病気は、私たち自身のカルマ、すなわち多くの人生にわたって積み重ねてきた自らの行為によって内側から生じるのです。もちろん、この世にはいくつかの喜びも存在します。常に痛みがあるわけではなく、常にアディバイカやアディバウテイカの問題があるわけでもありません。時には健康であり、他の生き物からも喜びを得ることができます。常に稲妻や地震が起こるわけでもありません。しかし、私たちが感覚から得るこれらの快楽には始まりと終わりがあり、また結果も伴います。すなわち、それらは心に印象を残すのです。バガヴァッド・ギーターは、これらの感覚的な快楽を「苦しみの源」と呼んでいます。私はこれについて触れたくありませんでした。なぜなら、薬

が強すぎるものになってしまいかもしれないからです。しかし、真実を知らなければ、あなたがこの幻想や陥ってしまったマールヤーという罠から抜け出そうと努力することは決してないでしょう。

『バガヴァッド・ギーター』でこれらの感覚的な快樂が「苦しみの胎」とか「苦しみの源」と呼ばれている理由は何でしょうか。お胎のなかに何があるかは、それが外に出てくるまでわかりません。同様に、これらの感覚的な快樂は、甘い砂糖で覆われているのですが、いずれ痛みを伴う結果をもたらします。これが現実であり、私たちはそこから逃れることはできません。では、どうすればいいのでしょうか。痛みを避け、純粹な喜びを得るためには何ができるでしょうか。私たちは、真我を悟り、神とつながるまでは、ただ喜びだけを、混じり気のない純粹な喜びのみを得ることはできないかもしれません。しかし、少なくとも痛みや問題を避けるための努力はできます。どうすればそれが可能でしょうか。方法があるのででしょうか。あります。師たちは、この世界の痛みと不完全さについて私たちに気付かせてくれました。時にはそれを聞くのは憂鬱になるかもしれませんが、師たちはそれを超越する方法も教えていただきました。師たちは、この状況を認識させただけでなく、それを克服する手段も示してくれました。二元性がある限り、快樂を求める限り、痛みは伴います。私たちが低次の意識状態にあり、靈的な訓練や教育を受けていない限り、痛みは避けられません。砂糖の覆いを味わいたければ、そのための苦みも味わう必要があるのです。

方法は、意識を高めることです。世俗的な苦と樂を超えて、意識を引き上げることです。完璧だと思ふ場所に身体を移動することもできますが、それでも痛みや苦しみを避けることはできません。なぜなら、苦しみの種は心にあるからです。ですから、心をよ

り高いレベルに引き上げることができれば、この苦樂の二元性から離れることができま
す。山や海に休暇で出かけたとしても、痛みから離れることはできません。なぜなら、
同じ条件付けられた心がそこにもあり、痛みや苦しみを伴うからです。休暇でどこかに
逃げたとしましょう。そうすると、おそらく最初の二日間には幸せを感じるかもしれない
ん。しかし、場所の新鮮さが薄れると、同じ問題に直面します。カッブルの場合も同じで、
数日後には再び同じ問題、同じ喧嘩が出てきて、同じような醜いことが浮かび上がって
きます。そして、数時間前には美しく見えた山々や砂浜、海も、もはや美しく見えなく
なります。低次の意識状態にあり、条件付けられた心に支配されている限り、どこに行
こうとも、この身体をどこに運ぼうとも、痛みを避けることはできません。心が適切に
訓練されておらず、制御されていない場合、問題を引き起こします。どこに行っても同
じなのです。

したがって、身体をどこかに連れて行っても問題は解決しませんし、とても快適な家
やホテルに滞在していても同じです。賢者たちは、意識を高め、絶えず変化し、不完全
なこの世界における痛みと快樂の流れに邪魔されないレベルに引き上げる必要があると
おっしゃっています。しかし、意識を引き上げようと試みても、最初は非常に困難です。
ほとんど不可能に思えるかもしれません。なぜなら、心は制御不能で頑固だからです。
私たちは、この世の物事からめとられています。むしろ、私たちの方が物事に堅くし
がみついていると言った方がいいかもしれません。この不完全な世界の物事にです。こ
の世の物事や快樂への執着が強い限り、意識や心を昇華させる過程は非常に困難で、時
には苦痛を伴うでしょう。もし私が縛り付けられていたとしたら、立ち上がるのはとて
も難しいのと同じです。「もし縛り付けられていたとしたら」と言うのは、実際には、私

たちが縛られているのではなく、私たち自身が物事にしがみついているからです。

ある時、師が弟子と共に歩いていました。弟子が師に尋ねました。「尊敬する師よ、質問があります」「そうか、何を知りたいのだ」「マージャーとは何ですか」。師はそれを聞くと、答えずに黙ったまま歩き続けました。そして弟子はその後を追いました。しばらく進んだところで、突然師は大きな木に向かって走り、木をしっかりと掴んで言いました。「来なさい。来なさい。引っ張ってくれ、引っ張ってくれ」。弟子が言いました。「なぜですか」「この木が私を捕まえているからだ」。弟子は師を引っ張りましたが、師は木をしつかりと掴んだままでした。弟子は一生懸命引っ張りましたが、師は木を握りました。弟子が「手を離してください」と言いましたが、師は掴んだままでした。師はまるで木にくっついていてるかのようでした。弟子は引っ張り続けました。しばらくして、師は木から手を放し、弟子を見て言いました。「これがマージャーだ」。私たちは、自分の欲望のために「それ」にしがみついているのです。実際には、マージャーが私たちを掴んでいるわけではなく、私たちを縛っているのは私たち自身の心なのです。

この世界の痛みや苦しみの問題の解決策は、手放すこと、上昇すること、超越することです。私たちは、底辺の意識レベルから徐々により高い意識レベルに上昇すべきですが、世俗的なものにしがみついているため、それができません。したがって、まずは物事への執着を緩め、それから離れることが第一歩です。最初のステップは「無執着」です。だからギーターでは、アビヤーサ（常習）の他に、世俗的で儂いものに対するヴァイラーギヤ、つまり離欲を育むべきだと言っています。この儂い世界、そして、すべての世俗的なもの―身体、夫、子ども、富、名声など―の移ろいやすく幻影的な本質を学び、認識することです。以前の話でも述べたように、本物の靈性（スピリチュアリティ）と

は、二つのものを発展させることです。一つはヴァイラーギヤ、もう一つはバクティです。ヴァイラーギヤとは、無執着、無欲、離欲を意味します。スペイン語では「デサペゴ」と呼ばれています。ペグ（杭）は人を固定し、一定のレベルに留めます。デサペゴは、そのペグ（杭）を取り除くことを意味します。私たちはこの杭によつて縛られています。この杭を引き抜かなければ、自由になることはできず、意識をより高いレベルに進化させることもできません。

したがって、最初に学ぶべきことは、自分がしがみついているものを少しでも手放すことです。すぐにすべてを手放しなさいとは言っていないません。徐々に行うべきです。では、どうすればそれができるのでしょうか。この世界の苦しみ、束縛、無常性、儚さについての正しい理解と気づきを通じてです。しかし、この理解の前にもう一つ重要なことがあります。

この理解と気づきは、どのようにして得られるのでしょうか。常に必要なものが二つあります―努力と恩寵です。この二つを組み合わせる必要があります。真の理解は、この世界の本質を完全に悟ったお方の恩寵と導きによつて得られるのです。このような悟りを開いた存在は「グル」あるいは「導師」と呼ばれます。その方は、この世の真の本質を私たちに理解させ、もう一つのリアリティ（実在）に意識を向けさせ、時にはその一端を味わわせてくれるかもしれません。私たちがこの一時的な世界の真の本質を理解し、もう一つの実在―より完全な人生やより完璧な喜び―の一端に触れることができた時、私たちの努力はより誠実なものとなります。だからこそ「師はあなたに気付かせ、そして少し味わせてくださる」と言われるのです。それは、蟻の触角に少しの蜂蜜をつけるようなものです。蟻はその匂いに惹かれて前進し続けます。蜂蜜の匂いがどこか先

から漂ってくると思うからです。師は、この世にあるものよりもはるかに甘く、幸せで、偉大なものがあることに気付かせてくれます。もし何かもっと偉大なものがあるなら、私たちはそれを得るために必ず努力するでしょう。

この世にはすべてのものがあり、物質的なものにすべてがあると私たちは誤解しているため、すべての努力がそれらを得ることに向けられています。神のマザーの影響、そして、多くの生にわたる自己暗示と感覚的享樂の習慣によって、私たちは求めているすべてが外界にあると自らを信じ込ませてきたのです。多くの挫折を経験し、無数の打撃を受けてもお、心は依然として「すべては外にある」という思い込みを固持しています。完全に完璧な喜びは、感覚器官が捉える対象のなかにあると私たちは確信しているのです。このような心の条件付けは、非常に多くの生にわたって私たちに埋め込まれてきたため、取り除くのは難しいのです。すべてがこの世にあり、究極はここにある、この目に見える世界がすべてだということを、私たちは信じてきました。

では、この条件付けはどのようにしたら取り除けるのでしょうか。自分自身を条件付けから解放し、自己催眠を解くための真摯な努力によってです。これは、自らの真の状態に気づかせてくれる師の指導を通して可能になります。この道において、真我を悟った師の存在が不可欠であるのはそのためです。師の悟りの力によって、自らの理解を完全に覆っている条件付けという暗闇に光が照らされます。これまで自分で信じ込んでいたことは、師の指導と師への献身的な奉仕によって徐々に洗い流され、やがて新たな理解、新たな認識が生まれるでしょう。

そしてそこから必要なのは努力です。霊的な発展や自己改善の過程には努力と奮闘が必要です。安楽椅子に座って、すべての霊的な成就が手に入ると思っではいけません。

ある程度の努力が必要です。実際のところ、執着の杭を緩めるためには、ある程度ではなく、非常に多くの努力が不可欠です。サーダナ（修行）は戦いです。それは自分自身との戦いであり、内なる戦いであり、多くの過去生でつくられた習慣や蓄積された条件付けとの戦いです。だからこそ、バガヴァッド・ギーターの教えは戦場で授けられたのです。真の戦場は内なる戦場です。バガヴァッド・ギーターは、霊的な求道者、特にヨーガ修行者がサーダナの過程で直面しなければならぬ内なる戦いを寓意的に表現したものです。

霊的な発展の道を進むことを決意し、人間の生の限界を超えて智慧を得ようとする時、あなたは戦場の真んなかで弓矢を持って立つ戦士のようなものです。多くの過去生からの自分の条件付け、自分の習慣、自分が作り出したもの、自分の態度、自分の誤った考え方、自分のプライド、自分の執着、そして主には自分のエゴ意識と戦うのです。これらすべてが、解脱への道を進もうとするあなたの前に立ちはだかります。最高の祝福に到達しようとする時、これらが、戦わなければならない実際の敵となるのです。

それゆえ、霊的な生は戦争や奮闘に例えられるわけです。禅思想においても、霊的な過程は小さな戦争として表現されていると思います。もし少しでも戦う準備ができていれば、背後にある大きな力が、あなたの戦いを助けてくれます。決して一人きりではありません。そのために、この戦いに入る前に、まず、支えと力と導きを与えてくださり、この内なる戦争を戦うテクニクを教えてください。あなたのお方の御足元に庇護を求める必要があるのです。そのお方は、あなたの一步一步すべての歩みにおいて、「心配するな、恐れるな。私がいる。私はあなたと同じように実在する」とおっしゃってくださいでしょう。求道者である弟子が、師の指示に従いながら修行を続けると、ヴィヴェーカ（識別）と

ヴィチャール（分別）が発達していきます。つまり、識別、より純粋な知性、適切な判断、そして力です。純粋な判断と識別は、何が実在で、何が非実在かを分別し、また、自分を束縛して真我や神から遠ざける力と、自分を解放してくれる力を見分けることを可能にします。誠実なサーダナと恩寵を通じて、これらのポジティブな資質が徐々に発展し、それによって自分を束縛している紐を緩めることができます。これらの神的な資質が戦う力を与えてくれます。そして、戦いを続けることで、徐々により高く上昇し、執着や誤った期待の紐によって意識が縛られていた底辺、低次のレベルから離陸することができます。

明日のお話でもう一つ触れたいのは信愛についてです。ある人にとっては、信愛が最初に来て、次に離欲が続きます。他の人にとっては、離欲が最初に来て、後に信愛が発達するかもしれません。ごく少数の人には、離欲と信愛が同時に訪れます。ですから、自分には離欲がないと心配する必要はありません。まずは信愛を育むようにしてください。どちらも、この儚い世界の痛みと苦しみを超えて、最高の祝福に到達する方法です。どんな速度で進むにせよ、正しい方向に進んでおり、正しい指導を受けている限り、また人生の努力や活動をどこに向けるべきかを知っている限り、このサンサーラー私たちが生きている二元性と生成の世界の波に完全に飲み込まれることはないでしょう。

ハリ・オーム。グル・ナーラーヤナ。

6. バクティ―人格神への愛

タポーヴァン 一九九九年八月八日



神は実在します。歩き、話し、愛し、私たちの願いを聞いてくれる神です。神は私たちの願いを聞くだけでなく、私たちを助けるために尽力くださり、慈悲を注ぎ、恩寵によって私たちを引き上げてくださいます。神を本当に愛し、神に身を捧げ、神の信者となることができれば、神はどこまでも助けてくださいます。「私は、本当に自らを捧げたもの、つまり完全に帰依し、私にだけ庇護を求める者たちのしもべとなる」とさえ、神はおっしゃいます。

これは単に信じていることや架空の話ではありません。裏付ける事例があります。実際に人々―私たちのような普通の人々―に起こったことです。インドには神を愛し、神に完全に庇護を求める伝統があります。この伝統をバクティと呼びます。

昨日は、離欲と無欲、そしてこの世に私たちを縛り付ける紐を切り、緩めることについてお話ししました。世俗的な欲望や愛情の多くの紐に縛られていると、離欲は非常に難しく恐ろしいものに感じられます。これらの紐を切るのは、ほとんど不可能に思えるかもしれません。離欲や無欲について聞くと、「確かにそれは素晴らしいし、良いものだ

ろう。間違ひなく眞実だろうが、少なくとも私にとっては実用的ではない」と思うかも知れません。

放棄の道は、既に長い道のりを歩み、非常に強くて、堅固で、決意があり、進化した魂のためのものです。既に適切な資格があり、感覚器官や心に対する多くの抑制を備えた者だけが、この否定の道を歩み始めることができます。それに対して、この世に対する執着を完全には解消してはいないけれども、神に対して引かれるものを感じる人々にとつては、バクティが道となります。

バクティは、感情や執着の即時の否定を要求しません。むしろ、それらの感情を一つの方向、形と性質を持つ人格神に向ける方法です。この道は、比較的易しく思えるかも知れません。少なくとも、否定や放棄の道ほど難しく厳しいものにはみえないでしょう。バクティの実践は、感情を人格神に向けることです。人格神は形を持ち、慈悲と恩寵の特質を備えています。そのため、神は目で見ることができ、神の教えや甘美な名を耳で聞くことができ、神に捧げられた供物を口で味わうことができます、神のために手で働き、愛情を持つて奉仕することができます。

離欲とは、自分の欲望や執着を空にすることです。一方、信愛とは、欲望を神に向け、神への愛で自分を満たすことです。もちろん、完全に空になる前に満たされることはできませんが、自分を完全に空にするのは非常に難しいことです。信愛の道を勧める人々は、神への愛を育むことから始めるように言います。たとえ世俗的な欲望や執着が心のなかにあつても、完全に空になるのを待つ必要はありません。信愛の実践から始めれば、それらは自然に変容されていくでしょう。

例えば、瓶に汚れた水が入っているとしましょう。そこにきれいな水を注ぎ始めると、

最初は瓶のなかで汚れた水と混ざり、きれいな水も汚れてしまいます。しかし、しばらく注ぎ続けられれば、汚れた水は徐々に外に流れ出し、最終的にはきれいな水だけが残ります。

バクティは、自分のなかにきれいな水を注ぐようなものであり、低俗な感情や欲望を徐々に変容させ、それらをサットワで神聖なものにします。否定できないならば、神聖化するのは感情、魅惑、執着を否定できないなら、それらを神聖化し、変容させるのです。それがバクティの道です。関係、執着、魅惑を神聖化することです。神聖化の過程では、この世にあなたを縛る執着や紐が徐々に緩み、最終的には断ち切れるでしょう。それは、強力な一つの情熱―人格神への情熱―を育むことによって離欲を達成する方法です。

ある聖者が私に、「真のヴァイラーギヤ（離欲）を育む方法は、情熱を捨てることではなく、それを一つの方向に向けることだ」とあるときおっしゃいました。つまり、神へのラーガ、情熱や愛を育むことです。一つの強い情熱、一つの目標、一つの欲望を持ち、それを育むことができれば、他の欲望は確実に消え去ります。何か一つのものを得ることを決意している時、心が集中しているこの一つの欲望に対して、他の欲望は補完的なものとなるか、自然に捨てられるのです。

執着を変容させる効果的な方法は、あなたが魅力や執着を感じる対象を神の一つの側面と見なすことです。例えば、子どもに執着しているなら、その子どもを神の顕れだと考えてください。ある人に心が引かれるなら、その人を神の顕れと考え、その人と思う時に自然に神をも思うようにしてください。このようにして、ヒンドゥー教の伝統では、人生や人間関係のあらゆる側面を神聖化してきました。

このようにして、あなたは執着や欲望を手放すのではなく、欲する対象や愛する人に神を重ね合わせていくのです。そうすると、心を集中させ、瞑想やヨーガを通じて一心不乱に多くの苦しみや奮闘を通じて得ようとするものが、簡単に自然に起こるようになります。恋人に対して魅惑を感じるなら、神を恋人として考えてください。神を聖なる恋人にするのです。そして、すべての感情をその聖なる恋人に向けるのです。

これはユニークな方法です。神を天高くにいる存在や超越的な原理としてのみ崇拜するのではなく、この世に内在する存在としても愛するのです。神を子ども、友人、恋人、師、父親として愛してもいいでしょう。どのような関係性を育みたいかは自由であり、神とはどんな関係性も築くことが可能です。神は、友であり、父であり、師であることができるのに対して、人間との関係は一つの形態しか築けません。友人は息子にはなれず、息子は父親にはなれませんし、恋人は母親にはなれませんし、母親は妻にもなれません。しかし、神という普遍的な存在とのあいだなら、どんな関係性も、自分が望むように築くことができます。もし本当に強く神を愛することができれば、神はその愛に応え、あなたに与えられないものは何もないと言われています。神を専心して愛することで、解脱は自然に生じます。解脱のために別途努力をする必要はありません。このようなバクティ、すなわち専心的な愛を育むには時間がかかります。こうした新しい態度は、信愛の実践を通じて育てなければなりません。これは一種のサーダナですが、その方法は否定や放棄ではなく、神聖化と変容の道です。

このように、断ち切るのが難しいように思える感情の紐や、この世に私たちを縛り付け、再びこの生成する世界に戻らせ、より高い存在や解脱の成就を妨げるような執着は、徐々に経路づけられ、浄化され、変容され、神聖化されていきます。また、心を静かにし、

集中することを妨げる落ち着きのなさも、バクティを通じて徐々に変容されます。

では、バクティを育むための実践について少しお話ししましょう。誰かを愛する時、その人のために何かをしたいと思うものです。インドには、神を着飾り、食事を捧げ、沐浴させ、寝つけるというシステムがあります。神々は私たちの歌を聴くのが好きなので、私たちは神々のために歌い、踊り、そして歓喜に浸ります。あらゆる行為は神々に向けることができ、かれらのために行うことができます。「神々」と言うのは、私たちは神が時代ごとに異なる形で顕現すると考えているからです。人は自らが崇拜したい特定の神の顕現を選ぶことができます。ラーマ、クリシュナ、シヴァ、母神などの人格神、あるいはグルさえもが、イシュタ・デーヴァター、つまり自分が選んだ神となることができます。

このような崇拜や礼拝の方法を通じて、ラジャスのグナ―落ち着きのなさや活動性を引き起こし、心や体を落ち着かせない特質―が変容されます。信愛の歌や奉仕を通じて、心は自然に静寂を得て、バーヴァと呼ばれる神聖な情感の境地に到達します。

「では、この世で私が好きなのはどのようなのか」と考えるかもしれません。「美味しい食べ物が好きだし、良い香りも好きだし、良い音楽も聞きたい」。例えば、ある人は「この世の良いものについてはどうですか。すべてを放棄しなければならいのでしょうか。それはとても難しそうです」と尋ねていました。

良いものを楽しむながらも霊的であることは可能です。もし料理が上手で美味しい食べ物が好きなら、それを神に捧げ、プ拉萨ードとして食べることができます。ですから、美味しい食べ物を食べることを放棄する必要はありません。神に捧げてから食べればいいのです。きれいな服が好きなら、神をきれいな服で着飾り、その姿を見て楽しむこと

ができます。また、良い香りが好きなら、美しい花や香水を神に捧げればいいのです。こうして、これらの美しい花や香水の香りを楽しむことができます。このように捧げ物を通じて、欲望を変容させ、同時に神への愛を育むことができます。

感覚器官の活動のすべてを神に捧げること、それらを神聖化することができます。そのため、食事単に腹を満たす行為ではなく、神聖な礼拝行為と見なされます。私たちが食事をする時、それは「ヴァイシュヴァーナラの火」、すなわち私たちの内なる生命の火への供物であると言います。神は「私はあなたの内に生命のエネルギーとして、生命の火として存在している」とおっしゃっています。すべては態度の問題であるということがわかるでしょう。食事の態度を変えることで、食事そのものが礼拝となり、供養となります。このようにして、あらゆる行動を変容させ、神聖化することができます。

このようにバクティの過程を通じて、あなたが「良いもの」と呼ぶものへの欲望をすべて変容させることができます。昨日、感覚対象の無常性についてお話をしました。ものには始まりがあり、終わりがあります。それは事実です。そのことはわかっているのですが、どうすればいいのでしょうか。私たちは美味しい食べ物を食べたいし、他のものも楽しみたいのです。

バクティの道では、「それらの行為を放棄できないのなら、神をそれらに関らわせなさい」と言われます。その行為を自分自身のためだけに行うのではなく、中心を神に移し、すべての行動を神に向けて経路づけるのです。すべての行動を神に向ける決意をしないと、習慣が変わることになります。というのは、神に捧げられない行為があるからです。例えば、インドではカーリー女神などの場合を除いて、神に肉を捧げることはありません。したがって、もし本当に神を喜ばせたいなら、肉を食べなくなり、自然にベジタリアン

になるでしょう。

同様に、他の多くのことも変わります。あなたの性質は神のために変容します。タマスやラジャスからサットワへと変わるのです。そして、最終的には神以外のものに対する欲望が消え、自然に欲望から解放されるでしょう。

歌ったり踊ったりするのが好きなら、神のために歌い、踊ってください。歌や踊りは信愛の重要な一部です。信者は神の名を歌い、神のために踊ることで、神を思い出します。では、神のために歌い踊り、神の名を思い出すと何が起るのでしょうか。それは次第にエクスタシーやバーヴァを生み出し、このバーヴァによって心は神の聖なる姿形に集中します。心のなかで神の存在の喜びを味わうようになり、自然に身体のことを忘れるでしょう。瞑想やヨーガを通じて努力して達成しようとしていることが、神の名を思い出すことで自然に起るのです。歌や踊りを通じて、ヨーガや瞑想で苦勞して得ようとしていることを達成できます。

この道では、何かを手放すことを恐れる必要はありません。ただすべてを神に向ければ良いのです。しかし、神は応えてくださいますでしょうか。応えてくださいます。神が応答くださった事例は数多くあります。神が全能で遍在するならば、神は望む場所に、望む時に、望む形で顕現することができます。あなたが神に対する強い愛を持ち、神に帰依すれば、神は顕現します。適切な温度になると水が氷になるようにです。無生物と見なしていた像が話しだし、絵は生命を得て、石は動き出します。無生物が生きたものとなるのです。これがバクティと神聖な愛の力です。

「たとえば神を自分の子どもとして愛するとして、神は本当に自分の子どものようになるだろうか」という疑問が生じるかもしれません。答えは、神は単に自分の子どものよ

うになつてくださるだけでなく、それ以上のものになつてくださるということです。神が身体を持つて顕現し、信者と人間のよう^にに交流する事例もあります。このことについては、明日いくつかの事例を紹介しましょう。神への愛と魅惑は、この世への魅惑とは異なり、人を束縛することではなく、むしろ解放へと導くのです。

ハリ・オーム

7. 誠実、切望、献身を通じて神は現実となる

タポーヴァン 一九九九年八月九日



切望は、何かへの愛の現れです。何かに対する愛が強ければ強いほど、そのものへの切望も強くなります。ですから、バクティでは、切望が非常に重要です。何かを得るためには、それを切望し、欲する必要があります。そして、その欲望を強烈にしなければなりません。神に触れるためには、非常に強烈な神への切望が必要です。

現代のある聖者はこう言いました。「もし神のために二日二晩連続で泣くことができるなら、神はあなたの前に現れるだろう」。私たちはこの世のものを切望し、それらのために涙を流し、持っていない物を思つて悲しみを感じます。しかし、すべてに意味を与える、私たちにとって最も重要なものを切望しようとはしません。自分自身の存在にとって最も親密な部分——常にそこにあり、今もそこにあり、これからもそこにあるもの、そして、自分自身の内にも外にもあり、私たちが知覚し、関わるすべてのものに存在するもの——は、切望しないのです。私たちは、儚く無常なもの、そして過ぎ去るものを求めますが、永遠に続くもの、変わらないもの、常に私たちと共にあるもの、そしてこの身体が消え去った後もそこにあるものを求めようとはしません。私たちは、その永遠なるものを知

ろうとせず、永続するものと触れ合おうともせず、完全なるものと一つになろうともしません。

私たちは本質的には無意味な多くのものを欲します。それらが無意味であるのは、結局のところ、それらは過ぎ去るものであるからです。また、私たちは無常な存在たちとの別れを経験します。この世におけるすべての関係は一時的なものです。この世界には永遠が保障されたものは何もありません。私たちは、関係を築く相手と共にこの世界に來たのではありませんし、その人たちと共にこの世界を去ることもできません。人はそれぞれ、自身のカルマの力によってこの世に生まれ、また自身のカルマの力によってこの世を去っていきます。私たちは、一本の木の下あるいはどこかに庇護を求めて集まった巡礼者や旅人のようなものであり、各々が時間を過ごした後は、それぞれの道を進み、それぞれの目的地へ向かって去って行くのです。私たちは必ず過ぎ去るものにしがみつきますが、永遠に残るものを欲しようとはしません。

バクティとは、その永遠なる存在から別れていることの悲しみを感じ、それとの合一を切望することです。ほんとうの信愛がある時、神以外のすべてが徐々に意味を持たなくなり、神だけが意味を持つようになります。信愛とは、神との別れの痛みを感じ、神のために泣き、神に触れることを切望することです。

この世のおもちゃで遊んでいる限り、母なる女神は私たちに近づいてくれません。この遊びのなかで、私たちは時には泣き、時には笑います。しかし、この世の遊びを楽しんでいる限り、この世に何か望むものがある限り、母なる女神は私たちのことを心配しません。子どもがすべてのおもちゃを投げ捨て、本当に泣き始め、母を心から待つ時に初めて、母親はその子どもを抱き上げて膝に乗せてくれます。ですから、神を本当に切

望せず、神からの別れの悲しみを強烈に感じない限り、神は私たちのもとに来てくれません。だからこそ、この信愛の道では、神がもはやあなたの元に来ざるを得ないほどに、切望し、泣けるようにならなければなりません。

では、どのようにしてそのように泣けるようになるのでしょうか。それは、神を専心的に愛し、神を自分の人生で唯一の意味ある対象とする時だけです。その時初めて、ほんとうに泣けるでしょう。輪廻転生の痛み―生と死の苦しみ、そして人生の不確かさ―を理解した時にのみ、あなたは本当に神のために涙を流すことができるでしょう。この世のあらゆる快楽は苦しみと混じり合っていること、そしてこの人生のゲームは無意味さと痛みに満ちていることを理解した時、本来の存在の境地を失い、生成の過程に入るなかで引き離されてしまった「永遠の同伴者」を、まちがいに切望するようになります。ここで、最近まで生きていた現代のある聖者の例を紹介しましょう。これは、神にまみえることを求める強烈な切望と、その切望がどのように神を顕現させたかの事例です。その聖者の名前は聖ラーマクリシュナです。聖ラーマクリシュナは、若い頃、カルカッタ近郊のダクシネーシュワルにある聖母カーリー女神の寺院で祭司を務めていました。この大きな寺院で祭司として神を礼拝していたのです。神を礼拝することが聖ラーマクリシュナの役目でした。

しかし、この祭司には非常にユニークな点がありました。聖ラーマクリシュナは単に形式的にあるいは機械的に礼拝をするだけではありませんでした。礼拝を行うとき、彼は、その儀式の深みや内なる本質的な意義を感じ取っていました。聖ラーマクリシュナの心には一つの疑問がありました。「神は本当に存在するのか。わたしが礼拝している母なる女神は本物なのか、それとも人間の心が作り上げた神話や幻想に過ぎないのか。そして、

もし母神が実在するのであれば、なぜわたしはその姿を見られないのか」。聖ラーマクリシュナは礼拝する母神の姿を心から見たいと切望していました。

聖ラーマクリシュナは時折、自然な感情に従って、儀軌に即しないやりかたで礼拝をしていました。そうした祭司としての務めを果たした後、彼は、近くの小さな森の木立のなかに入り、母なる女神を思い、瞑想し、涙を流して残りの時間を過ごしていました。聖ラーマクリシュナはよく「おお、母よ、私の前に姿を現してください」と泣きながら祈っていました。

母なる女神にお会いしたいというこの願いはきわめて強くなり、時には地面に転がって頭を擦りつけるほどでした。彼のこうした姿、母なる女神を求めて泣き、時には話し、祈り、地面に転がる姿を見た人々は、「まあ、この人は恐らく実の母親を亡くしたのだろう」と考え、同情しました。しかし、聖ラーマクリシュナが激しく泣いていたのは生みの母親を求めてではありませんでした。彼が泣きながら地面に転がり、「おお、母よ、私の前に姿を現してください」と心から呼んでいたのは、母なる女神でした。

日が経つにつれ、聖ラーマクリシュナの切望はますます激しくなりました。母なる女神に会いたいという願い、母神の姿を見たいという願いは非常に強くなりました。彼の切望は死に物狂いまでになり、人々は彼を狂っていると思うようになりました。彼の体は燃えているようになり、次第に忍耐も失われていきました。ある日、聖ラーマクリシュナはこう言いました。「母よ、あなたは多分存在しないのだ。そして、もしあなたが存在しないのであれば、生きていても仕方ない」。また別の日には、こうも言いました。「おお、母よ、あなたはおそらくただの石に過ぎず、人々は何でもないものを崇拜しているのだ。あなたは存在しない。もしあなたが存在するなら、なぜ私の前に姿を現さないのか。

もしあなたが私の前に現れないなら、この人生は無意味だ」と。

ある日、聖ラーマクリシュナが寺院の内陣で礼拝をしている最中、彼の切望は非常に激しくなりました。彼が祈り、涙を流していると、突然カーリー女神の手にある剣が目に入り、母なる女神に会いたいという狂気に駆られて彼はその剣を掴み、自分の頭を切り落とそうとしました。彼は「あなたが私の前に現れないのなら、この人生の意味はないから命を絶つしかない」と言ったのです。

聖ラーマクリシュナが剣を喉に当てようとした瞬間、突然別の境地に移行しました。周囲のすべて―まず寺院の壁、次に家や木々など―が次々と消えていきました。視界に残ったのは広大な空間だけでした。霧がすべてを隠しており、そのなかで、強烈なエクスタシーがありました。そして、霧が徐々に晴れると、広大な空間のなかに母なる女神の形が現れ始めました。石像が突然生命をもったのです。これが、聖ラーマクリシュナが最初に体験した母なる女神の顕現でした。母神は確かに存在するのですが、聖ラーマクリシュナのような切望がなければ現れません。ちょうど水が十分に冷えなければ氷にならないのと同じです。

この愛の道―崇拜の対象に感情を向ける道―は、自然に愛情が強くなっていき、他のすべてが無意味になる状態へと導きます。すべての物質的なもの、この身体やこの世界が意味を失い、唯一意味を持つのは、愛と崇拜の対象だけになるのです。これは、聖ラーマクリシュナが近代の十九世紀において実践を通じて示したものでした。「神のために泣くことができ、神を本当に切望できれば、神はあなたにとって確かな現実となる」と彼は言いました。インドでは、近現代の諸世紀においても、強烈な信愛を通じて神を見出した著名な信仰者が多くいます。

聖ラーマクリシュナの例は、「これらの出来事は聖者にだけ起こるのだ」と思わせるかもしれません。そこで今日は、小さな男の子の例もお話しします。

しかし、その前に、あなた方のなかの誰かに実際に起こった別の出来事をお話ししましょう。最近、ある人が聖マザーとの面談の際、日本で聖マザーが顕現なさったことについて話していました。それは像でもなく、絵でもなく、現実に起こったことでした。その人はこう言いました。「私はマザーをはつきりと見たのですが、それでもお聞きしたいのです。見たと確信していますが、そのことをマザーに確かめたいのです」。聖マザーは簡潔に答えました。「ああ、誠実と帰依がある時、そういうことは起こる。そのようなことは確かに起こるのだよ」。ですから、小さな男の子の例に入る前に、今日でも、これらのことが、誠実な信愛を持つ誰にでも起こり得ることを知っておいてください。誠実、帰依の心、そして純粋な切望があれば、神は形をとってお現れになります。

プリーの寺院町から数キロメートル離れた田園地帯に、ある寺院があります。巡礼者や信者がこの寺院を訪れる時、寺院の祭司は時折、ある話をしながら、神像の布を取り外し、その胸にある染みあるいは痕跡を見せます。祭司は「これらの染みは石像の胸にできたやけど痕です」と言います。まあ、どういう目で見えるかによって見えるものは異なるでしょう。もし肉体の目で見れば、それは石像に過ぎませんが、信愛の内なる目で見れば、その像は生きています。祭司はこう言います。「ここにあるこれらの染みはやけど痕です」。どのようにできたのでしょうか。「それは、神が熱い牛乳を飲んだ時にできたものです。神は急いで飲み干す必要があったため、牛乳がすこし胸にこぼれ、やけど痕を残したのです」。この出来事の背景には、神がなぜ急いで牛乳を飲もうとしたのかについての逸話があります。

遠い昔、バラモンの祭司たちの家族が、この神像を礼拝していました。各家族には、礼拝を行う日数が割り当てられており、それがかれらの家業であったため、礼拝を行う義務がありました。あるバラモンの家族には、祭司とその妻、そして子どもがいました。そして、この祭司の礼拝の順番が来ていました。祭司は毎日、神に食べ物や花、線香を供え、礼拝のすべての手順を行うために寺院に行っていました。

しかし、ある日、祭司は急な用事で出かけなければなりませんでした。祭司の小さな息子もまたバラモンの男の子で、既に成長して聖鈕を授かり、礼拝の儀式を学んでいた。そこで、父親が不在のあいだ、母親はこの子に「息子よ、この牛乳を神様に捧げなさい。そして、神様がそれを飲んだら戻ってきなさい」と言いました。

男の子は牛乳を持って行き、供物を捧げる手順に従いました。花とバジルの葉を供え、燈明を灯して線香をつけ、牛乳を神に捧げました。そして、「さあ、神様よ、この牛乳を飲んでください。母は、あなたが飲み終わったら帰るようと言ったのです」と言いしました。それから扉を閉めて待ち、神に「どうか飲んでください」と祈りました。その子は心の奥底から、ごく素直に「どうか、母がもたせたこの牛乳を飲んでください。あなたが飲むまで、私は帰れません」と言いました。それから扉を開けてみましたが、神はまだ牛乳を飲んでいませんでした。器にはまだ牛乳が入っていました。再び扉を閉め、男の子は泣きながら神に懇願しました。もういちど扉を開けると、ようやく器は空になっていました。「これで帰れる」と言って、男の子は器を持って家に帰りました。

家に帰ると、母親が「なぜこんなに遅くなったの」と尋ねました。男の子は「神様が牛乳を飲むのに時間がかかったので、遅くなった」と答えました。母親は「牛乳を飲むって。牛乳はどこにあるの」と言いました。男の子は「神様が飲んだ」と答えました。通常、

「飲む」とは神が受け入れることを意味し、その後で牛乳は家に持ち帰ります。母親は再び「本当に神様が牛乳を飲んだの」と尋ねましたが、「うん、神様が牛乳を飲んだんだよ」と男の子は答えました。母親は「まあ、たぶんこの子が牛乳を飲んだのだろう」と思い、それ以上気にしませんでした。

翌日、父親がまだ帰ってこなかったので、母親は再び男の子に「さあ、また牛乳を持って行き、神様に捧げなさい」と言いました。男の子は前日と同じように礼拝し、扉を閉めて神を待ちました。神がまだ飲んでいないのを見て、男の子は「神様よ、どうか早く飲んでください。お腹が空いてきました」と泣きながら言いました。しばらくして神が牛乳を飲んだのを見ると、男の子は器を持って家に帰りました。再び母親は牛乳はどこかを尋ねましたが、男の子は「神様が牛乳を飲んだ」と報告しました。母親は「この子は毎日牛乳を飲んでるんだ」と思いました。

父親が帰宅した時、母親は「この子は牛乳を持って行き、神様が飲んだと言っている」と話しました。そこで父親は男の子に尋ねました。「毎日お前が牛乳を飲んでるのか」。男の子は誠実に「うん、僕は飲んでない。神様が飲んでるんだ」と答えました。「神様が牛乳を飲んだって」。父親は「いや、お前が飲んでるのだろう」と言いましたが、男の子は「うん、神様が飲んだんだ」と答えました。

男の子の声には並ならぬ誠実さが感じられました。父親は「この子は自分の言葉に忠実だ。少し脅かしても、『いや、神が飲んだ』と言い続けている」と思い、そこにはいくらかの真実があるのではないかと感じました。そこで父親は「息子よ、私は旅で疲れている。だから今日もお前が牛乳を持って行き、礼拝して神様に捧げなさい」と言いました。それで、男の子は牛乳を持って行き、礼拝し、供物を捧げ、扉を閉めました。

父親は「今日は何が本当に起きているのかを見に行こう」と考え、男の子が牛乳を捧げた直後に突然現れ、扉を開けました。父親は「今日は扉を開けて、この子が牛乳を飲んでいるところをつかまえてやろう」と思っていたのです。

しかし、そこには、男の子が牛乳を飲んでいるのではなく、神が牛乳を飲んでる姿がありました。突然の介入があったので、神は急いで牛乳を飲もうとしたと言われています。その結果、牛乳が神の胸にこぼれました。熱い牛乳が神の胸にかかり、皮膚を火傷させ、その痕ができたというわけです。

祭司たちは神像のこのやけど痕を指し示し、「これはその時の痕であり、神が牛乳を飲んだ時にできたやけど痕です」と説明します。今でも、この出来事を記念して、特別な牛乳の供物が神に捧げられており、それが伝統となっています。

ここで、ヒマーチャルへの旅の際に私が自ら体験した、純粹で誠実な献身と完全な信頼の例を紹介したいと思います。

その夏、私はチャンディガルの裕福な紳士が一時的に貸してくれた山腹のコテージに滞在していました。コテージのすぐ後ろに小さな湧き水がありました。実際には、普通の湧き水ではなく、山腹の岩のすきまから水がじわじわと出てくるような小さな水源でした。それは夏のことで、雨が降らないと、ヒマーチャルのこの場所でも昼間はかなり暑くなります。

五月のある日曜日の朝、居間に座っていると、地元の女性や子どもたちがコテージの裏にある小さな湧き水の近くに集まっているのが見えました。かれらは鍋を持ち、乾いた小枝を折っていました。三つの石を置き、その上に水を入れた鍋を置いて火をつけようとしていました。しばらくして、私たちに牛乳をもってきてくれていた女性がやって

来て、プレーマーマンダジーに、自分たちが準備するプラサードを受け取ってもらえるようにスワームーजीにお願ひして欲しい、と言いました。プレーマーマンダは断りましたが、そうすると、かれらはダリア（ブルグアに似た小麦の粒）、砂糖、少しのお金を持つてきて、それが私への捧げ物であると伝えました。プレーマーマンダは再び断ろうとしましたが、私は彼を制止し、「かれらは純朴な人々で、この捧げ物は心からのものだから受け取り、感謝しなさい」と言いました。プレーマーマンダが供物を受け取ると、かれらはとても喜び、「今日は必ず成功し、大雨が降るでしょう」と言いました。

この言葉を聞いて、私は非常に興味を持ちました。空は完全に晴れていて、雨の兆しは全くありませんでした。私はその場に座つてかれらを見守りました。かれらは鍋でダリアを調理し、それをキチュリ（粥）にして供物に捧げました。供物を捧げた直後、暗い雲が空に集まり始め、あつという間に激しい雨が降り始めました。私は非常に驚きました。かれらは浄性のルールや正式な礼拝の作法にまるで従っていなかったからです。私は牛乳をもつてきてくれていた女性を呼び、「どの神を礼拝したのか」と尋ねると、彼女は「クワジャ・バガヴァンです」と答えました。私の知る限り、ヒンドゥー教の神々のなかにそのような神はいません。彼女たちは純朴な女性であり、正式な礼拝のルールに従わず、私の知っている神ではない神を礼拝していました。「クワジャ」という言葉はペルシャ語のようでした。しかし、彼女たちはすべてを心から、誠実さと疑いのない信頼のもとで行い、その結果雨が降ったのです。

ですから、純朴、誠実、帰依、献身、切望、愛によつて、非顕現のものが顕現するのです。それは、無形のものをも有形にし、超越的なものを内在的なものにし、無生物を命あるものにします。それが信愛の本質です。信愛の道さらには知識の道においても欠かせない

この切望やシユラッダー（信心）が授かるように、私たちもまた聖マザーにお祈りしましょう。信愛の道では、切望は、自分が選んだ人格神に対するものです。そして知識の道では、切望は、解脱への純粋な欲望、すなわちムムクシュトヴァ（解脱への渴望）です。誠実、献身、切望がなければ、霊的な道でも現世的な追求でも成功することはできません。その対象を本当に切望し、誠実で真剣な努力をしなければなりません。そこには誠実さと真の献身が必要であり、それがあればすべてが到来します。
ハリ・オーム。

8. 神との関係を深め、神を愛せ

タポーヴァン 一九九九年八月一〇日



信愛とは、神を人間として愛し、神との関係を築くことです。信愛の道とは、神をこの世に内在する存在として、人格をもっているように考え、そのようなお方を愛することです。そして、この信愛の実践を通じて、徐々に、皆にある本来の神性を認識し、すべての人間を神として愛する境地へと至ることです——ゴープーたちがどこに視線を置いても「わたしのクリシュナ」の姿を見たようにです。

人が真に神を経験するとき、神はもはや特定の像や神格に限定されなくなります。神そのものが信仰者の意識に現れるとき、神はすべてに遍在する意識として現れます——それは、すべてに内在する存在であり、そこから万物が生じ、すべてがそこに宿り、最終的にすべてがそこへ溶け込んで消えていくところの、普遍的な存在なのです。

こうして人は、神を人間として愛することから始め、すべての存在や万物のなかに神を見るようになり、ついには、宇宙全体に神を見る境地へと至ります。自らが神に溶けいり、神と一体となることで、有限と無限の結合、そして自らの意識と至高で普遍的な意識との結合が起きます。この合一において、創造、創造者、被創造物は一つとなり

ます。

では、どのように神を愛すれば、神が私たちにとって現実の存在となるのでしょうか。すべての種類の関係が神とは可能であると述べました。したがって、神を愛するためには、まず特定の関係を神との間に築く必要があります。これがバクティの道です。

このさまざまな関係のうち、最初に築けるのが「ダースヤ」（しもべ）であり、これは主に仕えるしもべの態度を意味します。信者は「神は主であり、私はそのしもべである」と考えます。そして、すべての行為を通じて主に仕え、従順で謙虚な奉仕者としての姿勢を取ります。クリスチャンの信者のなかにもこうした姿勢が見られます。神は主であり、主人なのです。かれらは神を主と呼びます。この形をとる信仰は、謙虚な奉仕、従順、崇敬の道です。ダースヤ・バクティは、弟子が師に対する姿勢でもあり、弟子は師に対する従順な奉仕者として無条件の尊敬を持って師に従います。ハヌマーンはダースヤ・バクティの完璧な例です。

次に「サキヤ」（友人）があります。サキヤ・バクティは神を親友や仲間として愛し、親しい友情を神と築くことを意味します。ゴーパーラ（牧童）たちがクリシュナ神に対して持つていたような態度です。サキヤ・バクティは神を自分により近づけるものです。神は高い天にいて近づけない超越的存在ではもはやなくなります。到達不可能で理解できない超越的実在が、愛の情感（バーヴァ）を通じて到達可能なものとなります。

神との関係を築き、神に対する親密な感情を育むことによって、神はこの世に内在し、顕現するのです——神は生きた現実となり、人格をもった存在となります。信愛の態度がより強烈で、真摯で、誠実であればあるほど、神はより強く顕現します。サキヤ・バクティでは、神を親しい友としてつきあい、神を自分の親友と想います。自分と神との

間に距離はなく、神は最も親しい相談相手であり、遊び仲間です。ゴーパールの友人たちは、クリシュナと冗談を言ったり、いたずらをしたりしました。かれらはクリシュナを神としてではなく、最も親しい友人、自分たちと同じゴーパール、牛飼いの少年として見ていたのです。牧童らはクリシュナと遊び、冗談を言い、からかいさえもし、一緒に食事をしました。

神格のどの側面に愛と信仰を向けるかは、自分で選ぶことができます。人それぞれ好み異なるため、唯一の神格は自らのさまざまな側面をさまざまな形で現してくださるのです。愛、慈悲、智慧、勇気などの諸側面です。それで、ヒンドゥー教徒は、クリシュナ、ラーマ、シヴァ、そして母なる女神を崇拜します。それらが唯一の絶対實在の異なる顕現であることを認識しながらです。

このようにして人は神格との関係を築き、この関係を築くことに没頭すればするほど、神は生きた現実の存在となります。その背後にある論理を見てみましょう。賢者たちは、この世界には実在性がないと言います。客体的な物質世界は、人の心の内容の投影に過ぎません。人の激しい欲望のために、この投影された世界が現実であるかのように現れるのです。しかし実際には、それはただの心の内容に過ぎません。

では、特定の神の形や側面に意識や感情を集中させたとしたら、意識はその形を取ることができないのでしょうか。インド哲学の諸学派によれば、神はそもそも形を持たず、純粹で無限の意識であるが、信者の愛と信仰のために形を取るといいます。したがって、神を友として奉仕し、愛し、瞑想するとき、神はあなたの友として、最も親しい仲間として顕現します。

離欲とは、自らを空にし、空虚になることです。しかし、この空虚にどんな意味があ

るのでしょうか。無の意味とは何でしょうか。カップが空なのは、それを満たすためです。ですから、この空虚と離欲の目的はそれ自体にあるのではなく、「すべてなるもの」を受け入れる準備なのです。信愛とは、この「すべてなるもの」である神を引き寄せることです。

神との関係には、他に、「ヴァーツアリア」（親子）があり、それは神を自分の子どもとして愛することです。皆さんは神を父として愛するということを聞いたことがあると思います、それは自分自身を神の子どもとして考えることです。キリスト教では、神を天の父として考えます。インドでは、神格を母なる女神と考えることもあります。神を母とし、自分をその子どもと考え、母なる女神の子どもとしての態度を育むのです。

しかし、ヒンドゥー教のバクティのユニークな点は、神を自分の子どもとして愛し、そのような態度を育んで、神とのあいだに子どもに対する関係を築くことがあるということです。信者は完璧なヴァーツアリア・バーヴァ（母性愛的な情感）に到達すると、神に軽くおしおきすることさえもためらいません。母ヤシヨードダがその例であり、彼女は、クリシュナ神をひもで縛ったのです。不可思議なマヤーによって三界を束縛しているその神をです。このようにして人は、自分が仕え愛する神に対してこうしたバーヴァを築くのです。ヴァーツアリア・バクティでは、神を着飾り、食事を与え、世話をします。あなたが幼い子どもである神を守る一方で、実際には神があなたを守ってくれるのです。このヴァーツアリア・バーヴァの一例については、後ほど述べます。

最後に、「マードウリヤ」（甘美）と呼ばれる関係があります。これは、神を聖なる恋人として、宇宙的に愛しい人として、最も親密な同伴者として愛することを意味します。バクティのすべての形のなかで最も親密なものが、このマードウリヤ・バーヴァです。これは他のすべてのバーヴァの頂点です。これが最も親密な関係だからです。愛し愛さ

れる人との関係では、一方が他方に溶け込むような合一があります。これがすべてのバーヴァのなかで最高のものであり、信愛の最終的な成就、最終的な頂点とされます。

ゴーピー（牧女）たちの伝統についてはご存じないかもしれませんが。リーダーとクリシュナについて歌うとき、私たちは聖なる恋人であるクリシュナとその愛しい人とのあいだにあるマードウリヤ・バーヴァを賛美しているのです。ゴーピーたちの道に従うことは、神に完全に身を捧げ、ゴーピーたちのように無条件かつ無私の愛をもって、聖なる恋人、愛しい人として神を愛することを意味します。それがマードウリヤ・バーヴァです。

これらが、四つの主要なバーヴァです。すなわち、バクティの道において培われる四種類の関係や態度です。もうひとつ、「シャーンタ・バーヴァ」（平安の情感）と呼ばれるものもあると言われます。これは、神の無限の平安と広大さを瞑想し、それに心を溶け込ませる観想者の道です。これもまた一つのバーヴァであり、無形で無限で平安なる神の側面を観想するものです。しかし、主なものとしては四つのバーヴァがあると言っているでしょう。ダースヤ（しもべ）、サーキヤ（友人）、ヴァーツアリヤ（親子）、そしてマードウリヤ（甘美）です。

先ほど、私はヴァーツアリヤ・バーヴァの実例を紹介すると言いました。それほど遠い昔ではない一九世紀、聖ラーマクリシュナの信者の一人に、「ゴーパーレル・マー」という女性がいました。この名前は「ゴーパーラの母」という意味であり、本名ではありませんが、彼女の幼子クリシュナに対する献身と愛のためにそのような呼ばれるようになりました。

ゴーパーレル・マーは、昨日お話しした聖ラーマクリシュナの信者であり弟子でした。

当時のインドでは、少女たちは思春期を迎える前の非常に若いうちに婚約や結婚をしていました。時には、結婚相手が亡くなり、再婚は許されなかったため、一人で生きていかなければならないこともありました。このゴーパーレル・マーもその一人で、幼い頃に若くして結婚しましたが、夫が早く亡くなったため、夫婦生活を送る機会を持てませんでした。

それ以来、ゴーパーレル・マーは独身生活を送り、ジャパを行い、ゴーパーラの像に奉仕しました。彼女は母性を満たすために、神格のこの側面を選んだのです。ゴーパーラは幼子クリシュナの別名です。ゴーパーラとは、牛（ゴー）を世話する者という意味であり、牛飼いの少年を指します。クリシュナはヴリンダーヴァンで牛の世話をしたため、ゴーパーラと呼ばれるようになりました。しかし、より深い意味もあります。「ゴー」とは感覚器官を意味します。感覚器官を制御し、感覚器官の主である方がゴーパーラと呼ばれるのです。

ゴーパーレル・マーは小さなゴーパーラを崇拜し、自分の子どもとして世話を始めました。ガンガー河近くの庭園にある小さな部屋に住んでいました。唯一の持ち物は、数珠の袋、ラーマヤナ、いくつかの身の回りのもの―料理用の鍋ひとつと、物入れ―だけでした。その頃は、天井から吊り下げた壺のなかに物を入れていたそうです。これがゴーパーレル・マーのすべての持ち物でした。彼女は、三〇年以上にわたり、こうした質素な生活を送りました。

ある日、ゴーパーレル・マーは数人と共に聖ラーマクリシュナを訪ねました。彼女は、ダクシネーシュワルのカーリー女神寺院に住んでいる聖者について耳にしており、訪ねたいと思っていました。聖ラーマクリシュナはゴーパーレル・マーを見ると、非常に奇

妙にみえる振る舞いをしたそうです。初めての出会いの際に、聖ラーマクリシュナは「何か食べ物を持ってきたかい」とゴーパーレル・マーに尋ねました。彼女は少し驚きましたが、バッグに入れていた普通のお菓子があったので、「これしか持ってきていません」と答え、それをお渡ししました。聖ラーマクリシュナはその甘い菓子を非常においしうに食べ、「次に来るときは、自分で作った料理を持ってきておくれ」と頼みました。

ゴーパーレル・マーは訪問後に家に帰る途中で、「もう二度と行かない。なんて奇妙な聖者なんだ。彼は師と呼ばれているはずだが、食べ物を求めて、『次に来るときは、自分で料理をして持ってきておくれ』なんておっしゃる。いや、もう二度とあの聖者のところには行かない」と思っていました。そうして帰宅しました。

しかし、彼女はもう行かないと決めていたにもかかわらず、どうしても抑えられない魅力に惹かれて、再び聖ラーマクリシュナのもとへと導かれました。この時、彼女は何かを調理してバッグに入れていました。こうして、聖ラーマクリシュナとゴーパーレル・マーのあいだに、子どもと母の関係が生まれました。悟りを開いた師である聖ラーマクリシュナは、ゴーパーレル・マーの前ではまるで小さな子どものように振る舞いました。彼女が持ってきたものは子どものようにすべて自分で食べ、他の誰にも分けませんでした。

ゴーパーレル・マーは何度も聖ラーマクリシュナを訪ね、ヴァーツアリヤ・バーヴァが深まっていきました。そしてある日、貧しくも絶対的な純粹さと素朴さに満ちたある小さな部屋で、突然、彼女が崇拜していた小さなゴーパーラが生きた存在となりました。ゴーパーラは血肉をもった存在であるかのようになり、彼女の方に這ってきて膝に乗りました。

このときゴーパール・マーは、明らかに普通の意識状態ではなく、エクスタシーに入っていました。この生命をもった小さなゴーパールは彼女から離れませんでした。ゴーパールは家族のような存在になり、小さな子どものように、食べ物求め、膝に座り、横で眠るようになりました。ある日、ゴーパール・マーはこの小さなゴーパールを抱いて聖ラーマクリシュナのもとへ行きました。周りの誰も彼女の腕のなかの小さなゴーパールを見ることはありませんでしたが、彼女の心のなかではそれは現実でした。彼女はゴーパールを抱いて聖ラーマクリシュナのもとへ行きました。聖ラーマクリシュナはゴーパール・マーを見ると、まるですべてを知っているかのように彼女に近づきました。そして、ラーマクリシュナが近づく小さなゴーパールは聖ラーマクリシュナに溶け込んで一体となりました。

これは物語ではありません。これは、そう遠くない過去に起こり、記録された出来事です。ゴーパールは聖ラーマクリシュナに溶け込み、再び彼から顕現しました。なぜなら、聖ラーマクリシュナは単なる師ではなく、「プレーマのグル」（愛のグル）であり、「アヴァターラ・プルシャ」（化身の人）だったからです。どんな神聖な体験も、そうしたグルの恩寵によって起こります。グルは神が現れるための媒体です。私たちも聖マザーのものとこのことを直接体験しています。それゆえに、私たちはグルを究極の神そのものとして崇拜するのです。

ゴーパール・マーは家に戻りましたが、エクスタシーの境地は続きました。ゴーパールはゴーパール・マーと共に生き続け、彼女は彼と共に人生を過ごしました。こうして、無生物と見なされている神像は、生きたものになりました。純粹さ、純真さ、献身、そしてグルへの誠実な奉仕と愛を通じて、無形の存在が形を持つようになり、超越的な

存在が内在的な存在へと変わったのです。聖ラーマクリシュナの恩寵によって、ゴーパール・マーが生涯にわたって育んできたヴァーツアリヤ・バーヴアは、彼女が一生を捧げ、共に生き、毎時毎分を共に過ごした神像から神格が顕現することで、完成と頂点に達しました。

これは、無限の存在、無形の存在が信者のために形を取ったひとつの事例です。真に誠実な信者は、バーヴアを通じて、抽象的な真理を現実の血肉をもった存在として顕現させることができます。ある温度に達すると水が氷になるようなものです。強いバーヴアー愛情、献身、誠実さの情感―が、超越的な実在を形あるものとして顕現させるのです。これが、誠実なバクティ、信愛の力です。
ハリ・オーム。

9. 聖地と愛ある奉仕

タポーヴァン 一九九九年八月二日



これらの物語を皆さんにお話ししているのは、霊的な人生が想像上のものや伝説ではなく、現実で具体的なものであることを示すためです。霊的な人生は、正しい努力とグルや神の恩寵を通じて達成可能なのです。人々は愛情、親愛、献身、奉仕の心を持つことで、超越的な存在を見出してきました。だからこそ、これらの物語は非常に重要です。このように神を悟った人々の実際の事例は、私たちにとって大きな励みになります。それらは、私たちがこの道を歩むように勇気づけてくれます。

インドには多くの聖地とされる場所があります。そのなかでも特に神聖で、霊的な修行や霊的な人生を送るのに有益であるとされる場所がいくつかあります。これらの聖地は、神を求め、神を観想し、神の存在を感じ、神のお姿を見た人々によって清められ、神聖にされ、霊的な波動で満たされているのです。これらの場所では、神の存在が感じられるだけでなく、神が具体的な形をとってお現れになったと信じられています。

これらの聖なる地や場所には、神を求める者に靈感を与える何かが存在しています。ある人は、インドは川、木々、山々、岩々までもが神を観想している国だと言いました。

だからこそ、この国では川、木々、山々、岩々に宿る靈を崇拜する伝統があるのです。

これは作り話ではありません。何千年もの時を経て、この地は靈的な波動を蓄積してきました。神々そしてブッダなどの悟りを開いたご存在がこの地に顕現なさったからです。仏教徒はインドの地を聖なるものとみなします。なぜなら、ブッダはここでお生まれになり、仏教の起源はここにあるからです。また、ラサには、チベット語で書かれた、イエスに関する古代の正統な文書が保管されていますが、そこには、イーシャ（イエス）が一三歳か一四歳の時に、神の地インドへの旅をしたと記録されています。そこではプリーのことも特に言及されています。イエスに関する隠されてきた事実が徐々に明らかになりつつあり、『イエス・キリストの失われた歳月』や『誰が石を動かしたのか』といったこれらの秘密の事柄に関する多くの書籍も出版されています。多くのブッダやキリスト、聖者たちがこのインドの聖なる地で生まれました。それだけでなく、神ご自身が人間としてこの聖なる場に顕現なさり、神聖なる土地に足跡を残され、その神的な波動で大気を満たしています。現在、この地は灰に覆われていますが、その灰のなかには、神聖な炎が生き続けているのです。

数年前、私はドイツに滞在しており、非常に美しい田舎に住んでいました。ドイツには今でも美しい自然が残っており、木々や川が豊かです。私が滞在していた場所は美しい農場、山々、木々、きれいな家々、そして穏やかな生活があり、すべてが非常に美しく整っていました。

しかし、私はその地からマザーに手紙を書きました。「マザー、ここはすべてがとても整然としており、目には非常に美しく映りますが、心の琴線に触れません。存在の内なる核には何も響かないのです。それはなぜでしょうか。ドイツ人は生来とてもきちん

した民族で、生け垣を刈り込み、車をきれいに洗い、すべてがとても秩序正しく整えられています。特に私が住んでいた場所では、すべてが整然としています」。

私は何か重要なものが欠けていると感じていました。すべてが目には美しいのですが、内面には何も響かないのです。それが私が認識し、感じたことでした。アーシユラムに戻ると、マザーはとてもシンプルな言葉で、その土地に欠けているものを教えてくれました。マザーは、「その土地には神のおみ足が触れたことがないのです」と言いました。つまり、神が人間や他の形をもってそこに現れたことがないということです。神が形を持って現れ、リラー（神の遊戯）を行った地は、インドだけです。ですから、「アヴァターラヴァード」（化身信仰）の伝統がインドの靈的伝統において重要な意味を持つのです。

海外からインドに来る人々は多くいますが、かれらの体験談を聞くと、インドには特別な何かがあると言います。なぜでしょうか。その理由は、聖マザーが私に教えてくださったことにあります——究極の實在、最高存在がここで人間や他の形をもって顕現したからです。

それにしても、インドの外面的な条件は、特に海外からの訪問者にとっては非常に良くないものです。だからこそ、ここに来ると、到着してすぐに逃げ出したくなり、次の便で帰りたいがるか、あるいは、ここに留まって何度も再び訪れることになるかどうかに分かれます。外面的には、ここはよくない状況にあります。他国と比べて経済的・物質的な快適さに欠けています。また、時には混沌とした状況になりますし、衛生状態もよくありません。誇れないようなことはいくつもあります。しかし、さまざまなアヴァターラ（化身）を通じて、神のおみ足の跡がこの地に残されたこと、また、無数の人々

の前に神がお現れになったことが、この地を他とは異なる特別なものにしています。他の場所は、外面的に非常に美しく、物質的には整然としていても、非常に重要な何かが出来ており、その何かは、神あるいは神的存在が触れなければ現れず、覚醒しないものなのです。

神の触れたアーリヤヴァルタ（アーリヤ人の地）には生きた霊的な力があります。それは、容易に理解したり論理的に説明したりすることはできませんが、感じ取ることはできます。だからこそ、スワミ・ヴィヴェーカーナンダはかつて、「インドに行ってもって行かねばなりません。そしてその時、すべてを発見するでしょう」とおっしゃいました。彼の言わんとしたことは、ここでは霊性が誤解を招くものに覆われており、インドに何が本当にあるのかを発見するためには、ある程度の霊的な感受性が必要であるということです。

聖地の話に戻りましょう。インドにはヴリンダーヴァンと呼ばれる場所があります。ヴァンとはタポーヴァンと同じく「森」を意味します。かつて、そこは緑豊かな森林地帯で、森や牧草地が広がり、川が流れていました。この地には神がクリシュナとして顕現したと信じられているので、神聖な場所とされるのです。

現在のヴリンダーヴァンには、クリシュナ神を祀る多くの寺院があります。クリシュナ神が遊戯をした場所、神がこの世にお現れになった時になさった、さまざまナリーラ（舞）に関連する場所が存在します。多くのクリシュナ神の信者たちはここに住んで神を觀想し、いつの日かダルシャンが得られることを期待しています。また、多くの未亡人もここに移り住み、貧困のなかで生活しながら、神に人生を捧げ、神の奉仕を行い、神の

名を唱え続けています。ここで起こった一つの出来事をお話ししましょう。

ある時、グリーンダーヴァンに住む女性が、ラーダー女神とクリシュナ神の神像を祀る寺院で奉仕をしていました。彼女は毎日、花を集めて花輪を編んで、神に捧げていました。彼女の一日の活動はすべて、神への奉仕に向けられていました。彼女はラーダー女神とクリシュナ神の寺院の近くに住み、寺院を清掃し、花輪を作り、それを毎日神像に捧げ、神の名を唱えて過ごしていました。彼女は、いつの日か神が目の前にお現れになって、ダルシヤンをお授けくださること、その神聖な恩寵に浴することを夢見ていました。神が形をとってお現れになるその日を夢見ながら、その密かな願いをもつて、彼女は寺院での奉仕を続けていたのです。

何年も経ち、彼女は老いていきました。ある日、花輪を編んでいる最中に、突然こんな考えが頭をよぎりました。「これまでずっと奉仕をしてきたけれど、こんなことを続けて何になるのだろうか。もしかしたら私は人生を無駄にしてしまったのかもしれない。私は本当は存在しない神に奉仕してきたのかもしれない。もし存在するのなら、神にはご慈悲がないのだろう。私は何年も神に奉仕してきて、もう老いてしまった」。彼女はさらにこう思いました。「ここにおいても仕方がない。私の願いは決して叶わない。今日は作った花輪を神像に捧げるのはやめて、このクリシュナの地を去ろう。クリシュナ神は私の祈りを聞いてくださらなかった。神にはご慈悲がない。だから今日、私はこの地を離れることにしよう」。

彼女はそう思いながら座り込みました。去ることを考えるととても悲しく、涙がこぼれましたが、彼女は決心しました。去ることを決めた頃には、すでに花輪を作り終えていました。その二つの花輪はとても美しいものでした。というのも、彼女は何年も花輪

を作り続けており、熟練していたからです。どの色や花を使うべきか、またそれらをどのように配置すべきかを心得ていました。彼女は本当に心を込めて丁寧なそれらを作っていたのです。

しかし、その日、彼女は、編み終えた花輪を神像に捧げずにその地を去ることにしました。ただし、すでに作った花輪を捨てることはできなかったもので、それを手に持ち、寺院を離れました。歩き始めると、涙が頬を伝い落ちました。彼女は長年、神のダルシヤンを得ることを唯一の目標にして、この地に留まってきたのです。多くの年月を神に奉仕してきたのに、神のダルシヤンが得られなかったことが、ひどく辛く悲しく思われ、涙がとまりませんでした。

彼女は去りがたく思いましたが、心を決めていたので、寺院の境内から出て、歩いていきました。歩き続けていると、二人の子どもが彼女の後を追ってきて、「母さん、どこに行くの。どこに行くのさ」と、ヴリンダーヴァンの方言で話しかけてきました。

少年は彼女を少しからかってさえいました。彼女は「私を一人にしておいて。あっちに行きなさい」と言いました。しかし、少年は「どこに行くの。どうして行っちゃうの」と問いかけ続けました。彼女は、「ほっ」といって。どっか行きなさい」と、花輪の入った袋をしつかり手にもちながら、言いました。「聞かないでよ」とつぶやきながら、彼女は歩き続けました。しかし、子どもたちは去ろうとはせず、彼女の後を追い続けました。

ヴリンダーヴァンの町の境を越えようとした時、突然子どもたちが言いました。「じゃあ、行っちゃうのなら、どうして花輪を持っていくの。作った花輪は僕たちにちょうだい」。その花輪は神への愛をすべて込めてつくったものでしたので、彼女はそれを隠そうとしました。しかし、子どもたちは「その花輪は、あなたが捧げようとしたその方に渡

してちようだいよ。もって行かないで」と言つて、彼女から花輪を奪い取りました。

子どもたちが触つたその瞬間、彼女は外的な意識を失い、エクスタシーに包まれた信愛の至福に没入しました。彼女は周囲の状況に全く気付かなくなり、身体意識を失い、至福の海に溶け込んだのです。この至福の境地にあるとき、その至福の海のなかから、彼女が人生をかけて長年にわたつて奉仕してきた神々が形を現しました。そして、彼女は神々が自分の編んだ花輪を身につけているのを見ました。

しばらくして意識を取り戻した彼女は、急いで寺院に戻りました。走り急いで寺院に着いた時には、もう扉が閉まりかけていたので、彼女は祭司に「少しでも神のダルシャンをさせてください。神を見たいのです」と懇願しました。彼女は普通の境地にはありませんでした。祭司は「花輪はすでに捧げられたし、あなたの役目は終わりました。なぜまた見たいのですか」と言いましたが、彼女は「いいえ、ほんの少しだけ見させてください」と頼み込みました。寺院に入ると、リーダーとクリシュナが彼女の作つた花輪を身につけているのを見て、彼女は再びエクスタシーに包まれました。おそらくその瞬間に身体を去つたと思われまゝ。献身的な愛ある奉仕と神のダルシャンへの真摯な渴望の結果、神は人間の形でこの信者に顕現し、彼女を神の聖なる領域へと連れて行つてくたさつたのです。

ヴィシュヌ派の信者たちは、すべての修行や奉仕の目的は「バーヴァ・ネートラ」（バーヴァの眼）を育むことであり、それによつて神を見られるようになることだと言います。信者にとつて、奉仕は手段であるだけでなく、目的でもあります。神のご意志により、どんな世界や状況に置かれようと、信者は、神の永遠なるしもべとして奉仕し続けたいと願っているのです。

10. 信愛―感謝の態度

タポーヴァン 一九九九年八月一二日



これまでの数日間、サットサンガで議論を共にしながら過ごしてきましたが、最後に信愛のもう一つの側面について触れましょう。それは、「感謝の態度」についてです。

これまで、バクティにおいて切望が非常に重要であると述べてきました。神への渴望や、神への涙が必要だと話しました。しかし、もし私たちが神への愛を感じていないとしたら、どうやって神への切望を感じることができるようか。愛や信愛を感じることがなければ、切望は生まれません。では、まずどのようなにして信愛を感じることができるようか。

感謝が、信愛を感じるための一つの方法です。私たちの人生やこの世界には、感謝すべき多くのことがあります。命を支える要素、例えば空気や水など、自然全体、四季の移り変わり、両親、友人、そして他にも多くのものについて考えてみてください。命を支えるこれらすべてのものを、私たちが自ら作り出したわけではないことを理解するとき、これらの命を支える諸原理を生み出した創造主について自然に考えるようになります。そして、心のなかに深い感謝の念が自然と湧き上がるのです。

美しい日の出や暮れなずむ夕日、夜空に輝く星々、そして人生や自然の美しさを目にしたとき、それらの背後に創造主がいらっしゃるかもしれないと考えたことはないでしょうか。そのように考えることで、私たちは当たり前のように享受しているこれらの美しいものに対して、自然と感謝の念を抱くようになります。

私はよく人々にこう言います。「お金がたくさんあっても、もし空気や水がなかったらどうなると思いますか」。このことを考えてみてください。お金があっても空気がなければどうなるでしょう。あるいは、何日も太陽が昇らないとしたらどうでしょう。家にはたくさんお金があるけれども、水がないとしたらどうでしょう。このようなことを考えたことはありますか。生きることは可能でしょうか。私たちはお金だけが暮らしを可能にするものだと考えがちですが、実際には他にどれほど多くの要素が命を支えていることでしょう。このような考え方を持つようになり、これらをすべて与えてくださったご存在のことを思うときに、心に湧き起る感情のことを「感謝」といいます。

もちろん、これらすべては科学的な説明によって却下されるかもしれませんが、例えば、「水は水素と酸素が特定の割合で結合してできるものだ。ここに創造主の存在は必要ない」と。それは一つのものの見方ではありますが、これだけでは完全な説明とは言えません。たとえば、一輪の花を取り上げて細かく解剖し、分析するとしましょう。雄しべや花弁の数、その他すべての構成要素を分析できるでしょう。これで花についてすべてを分析したかもしれません。花にはそのような分析を超えた微妙な何かがあるのです。花の本質である美しさや香りは、あなたの分析ではとらえられないでしょう。それをどうやって分析することができるのでしょうか。

このように、自然の原理についての分析は物質的な側面に限られたものであり、五感

で捉えられる表面的なものに過ぎません。しかし、そこには、より微細で、感知されることも分析されることもないものが存在しています。そのため、こうした物質科学的な探求が行われる以前には、人間は神秘と驚異を感じていました。そうした神秘と驚異の思いから、人は、自分たちを取り巻き支える霊、創造主、偉大なるもの、神秘的な原理の存在を感じていました。

原始人は自然の原理、たとえば荒れ狂う風、海の大波、広大な砂漠、嵐や雷、空の星々、靈妙な光を見て、恐れ、驚き、神秘を感じました。そして、自分たちの理解を超えた何らかの力があるのだと思っただけです。

このような神秘と驚異の感覚は必要です。今日、私たちは宇宙を理解していると思っています。そのため、もはや神秘や驚異を感じることはありません。私たちはすべてを知っていると思います、科学がすべてを説明してくれたと感じているため、神秘と驚異の感覚を失っています。このすべてを知っているという心の態度は、西洋から来た教育システムによって育まれたものであり、それによって謙虚さという資質が失われています。

謙虚さは、霊的な道において最も重要な資質のひとつです。謙虚さは、信愛を育むために必ず必要な資質であり、真の知識や智慧の獲得、そして真我の悟り、さらには最終的に高次の世界に私たちが到達することを助けてくれます。しかし、世俗的な知識や学術的な達成による誇りや虚栄心のために、今日では私たちの頭は高く上がり、本物の師や、創造主であり維持主である神に頭を下げるのが難しくなっています。世俗的で科学的な知識によって多くを成し遂げてきましたが、同時に、心を豊かにし、靈感を与えてくれる非常に重要で美しいものを失ってしまったのです。驚異、神秘、賞賛、感謝の感覚を失うことで、あの別の側面——霊性と信愛——も失ってしまいました。私たちは物質

的、機械的、論理的、非常に有能で効率的な存在になりましたが、同時に本質を持たない、わら人形のような、あるいは超効率的な機械のような浅薄で空っぽな存在になってしまいました。

原始人は山々の上に昇る日の出を見ていました。暗い夜の後に日の出を見ると、ひざまずいて祈りました。水面に映る月を見たときには、感謝の念でひざまずきました。おそらく、そうした祈りと感謝が信愛に発展したのでしょう。人間は、自然の原理をより高次の力の現れとして祈りを捧げたのです。とても乾燥した酷暑の夏の後、雨が降り始めると、人は喜びで踊り、神と自然の原理を称賛して歌いました。それがヴェーダの最初の讃歌です――日の出、川、季節などを称賛するものです。

今日でも、ラージャスターンでは雨が降るときに祭りを開きます。かれらは踊り、歌い、祈り、喜び、神を讃えます。ラージャスターンは主に砂漠の地域です。非常に乾燥した暑い夏が続き、水はほとんどありません。ですから、かれらは雨に対して深い感謝の念を抱いています。雨は乾いた大地を潤し、作物を育てることで命を支えるからです。

このように、神への礼拝や祈り、信愛の背後には、深い感謝の念があります。この感謝の念は、サナータナ・ダルマにおいて非常に重要な要素です。多くの実践の背後には、感謝の念があるのです。ダルマとは生活の道を意味します。人と命を支え、バランスを保つ原理を指すのです。ダルマとは「支える」という意味です。支えるものがなければ、人は倒れてしまいます。したがって、ダルマとは人類を支えるものです。母が子どもを膝に抱えるように、人類を支え、低いレベルへ墮落することを防ぐのです。

サナータナ・ダルマには、特定の習慣があり、それがインドでの伝統になっています。たとえば岩や木や動物を崇拜することです。岩、木、動物を崇拜する理由は、非常に論

理的に説明できます。多くの宗教は「霊がすべてに満ちている」と述べていますし、科学も「すべてはエネルギーである」と言います。崇拜は、日常生活においてこの事実を再確認するために行われます。そのため、インドでは山、川、木々、動物が崇拜されています。ただ、なぜ特定の動物や樹木がより神聖とされているのか、その論理的な答えを見つけるのはとても難しいです。しかし、より深く考えると、この一見するとおかしいように見える習慣にも答えが見つかります。

多くの人は、なぜヒンドゥー教徒が牛を崇拜するのか不思議に思います。どうしてヒンドゥー教徒は牛を食べないのかと疑問に思うのです。しかし、例えば「あなたはなぜ猫を食べないのか」と尋ね返したとしたら、あなたは単に「好きじゃないから」とか「習慣になっていないから」などと答えるかもしれません。これまで長い間、あなたがたが猫を食べなかったのと同様に、ヒンドゥー教徒も長い間、牛を食べてこなかったのです。ですから、これは、それほど不思議に思うことではありません。

それでも、なぜヒンドゥー教徒は牛を崇拜するのでしょうか。牛は単なる動物であるにもかかわらず、なぜ崇拜されるべきなのでしょう。実際には、牛だけが崇拜されているわけではありません。バナナの木やココナツの木もまた神聖であると考えられています。ヒンドゥー教徒は川もまた神聖なものと考えています。これには論理的な根拠や健全な考えがあるのでしょうか。それとも、奇妙な風習なのでしょうか。

私もまた、なぜ牛が崇拜されるのか疑問に思っていました。一つの答えとして感じたのは、サナータナ・ダルマの信奉者たちのあいだでは感謝の念が非常に強いということです。赤ん坊の頃、固形物を食べることができなかった私たちにミルクをくれて育ててくれた牛に対して、子に授乳する母に対するように感謝の念を抱いたのです。だから

こそ、牛を母とみなし、「ガウマーター（牛母）」と呼ぶのです。この地には、私たちを養い、歩けなかった頃に手を引いてくれ、歩み方を教えてくれた両親を尊敬する伝統があります。また、生命を支えるすべてのものへの感謝の念が深く染み付いています。親への感謝、自然のさまざまな原理への感謝です。だからこそ、太陽が神として崇拜され、火や水もまた神とされています。この感謝の念が崇拜という形を取るようになったのです。崇拜は、信愛を生み出し、信愛はさまざまな崇拜の形を通じて表現されるのです。

西洋人は、東洋ではなぜ若者が年長者を尊敬しなければならないのかを不思議に思っています。なぜ従順さや尊敬が必要なのか、なぜ子供が年老いた両親を支えなければならぬのか、なぜ年配の人が世話をされなければならないのか、という点についてです。これらのすべての根底にはひとつのものがあります。それは感謝の念です。

感謝から生まれる尊敬は、信愛や靈性の発展のためだけではなく、円滑な社会的交流、適切な社会秩序、調和と平和のある共存のためにも必要です。だからこそ、妻は夫を尊敬し、夫は妻を支えるべきですし、生徒は教師を尊敬し、教師は喜んで知識を与えるべきなのです。

今日の社会では、こうした価値観はもはや存在しません。何に対しても感謝や尊敬をしなくなった結果、今日の世界は非常に緊張した状態にあります。極度に病んで退廃した社会となっています。学生は教師を尊敬せず、学校や大学では非常識な行為が行われています。また家庭生活は地獄のようなものになっています。しかし、インド社会ではかつて、感謝から生まれる愛と尊敬が当たり前のこととして受け入れられていました。西洋の影響により、今日の社会でその逆の状況を目の当たりにすると、なんだか奇妙な感じがします。秩序ある社会が崩壊し、壊れつつあるのです。

こうした説明をしているのは、感謝の念を支える論理、そしてグルに対する従順さと尊敬そして一途な献身を支える論理を、皆さんが理解できるようにです。これらは、霊的生活の重要かつ不可欠な要素です。信愛を発展させるために、また社会を円滑に運営するために必要な要素なのです。

よく考えてみてください。私はほんの一部の側面についてお話しましたに過ぎません。深く考えると、感謝の念がいかに必要かがわかるでしょう。すると、これまでわからなかったことについて、それを支える論理がどういうものかが理解できるようになります。なぜ他者を助け、尊重しなければならないのか、なぜ自分の利益のためだけに行動するのでなく、他者を思いやらなければならないのか、などです。感謝の念を理解すると、これらのことがより深い意味を持つのです。

生命を支える自然の原理や、そこから得られる恵みに対する感謝の念が芽生えたと、創造主への感謝で満たされるでしょう。創造主を讃え、称賛し、奉仕し、愛したいという思いが内に生まれるでしょう。これこそが信愛です。すなわち、神を讃え、称賛し、奉仕し、愛すること、「バジャ・セーヴァヤー」です。

今日の話は、皆さんがここを出発する前の最後の話となります。皆さんは、日常生活に戻り、さまざまな重荷を抱え、義務を果たさなければならぬ日々を迎えることになります。しかし、これまで私がお話したこと、あるいはこの私という小さな器を通じてマザーが語ってくださったことを思い出すことで、皆さんの心の重荷は軽くなるでしょう。人生で行わなければならない義務、やらなくてはいけないけれどもしたくなかった義務に対しても、別の態度をとることができるようになります。私が話したことを心に留めておくことで、義務や責任、そしてこの人生の重荷は軽くなることでしょう。また

このことを専心して深く想うならば、心もまた愛と信愛で満たされるでしょう。生命を支えるすべてのものと同胞への感謝の念および創造主への信愛が、霊的な道を歩むための助けとなります。

聖マザーの祝福が皆さんに降り注がれますようにお祈りします。
ハリ・オーム

奉仕と信愛
—人生のプロセスと真の目的—

2025 年 1 月 初版発行

著者 スワミー・アーナンダ
発行者 ディビャダーム・ヨーガアーシュラム

Chakratirtha Road, Puri - 752002, Odisha, India

© 2025 Dibyadham Yogashram

本書の無断複写は禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、
ディビャダーム・ヨーガアーシュラムより書面で許諾を得てください。